

講師近影

修学校として建てられたものを、 ここは戦後すぐの一九四五年十 の隣にある苔が生えた建物です。 それっ」て言われることがあるん 館の者です」と言うと、 るところがあります。 土文化館です。たまに「郷土文化 月に神奈川県の婦人の職業研 小田原市には博物館と呼ば 民俗・歴史・動植物の調 図書館(旧中央図書館) 小田原市郷 . 「何処だ?

これから色々なことを調べなき のは私が初めてということです。 ゃいけないという状況にありま 俗学の学芸員としてやってきた すが、私より先に民俗学をやった 当学芸員です。まだ三○代半ばで 館となったという、意義のあると の成果を発表する場が必要だと す。その中でも私が特に注目して つやられた方はいたのですが、民 学芸員はいませんでした。少しず いうことで、県に掛け合って博物 ころなんです。 私はこの「博物館」の民俗学担

道祖神のイメージ

るのは道祖神なんですね。

お話を最初にしたいと思います。 道祖神の一般的なイメージの 道祖神と聞くと、村とか集落の



第 267 号

発行所 小田原史談会 小田原市早川 60 TEL (22) 8852

原の道祖神と道祖神祭り(上) 査をされていた方々が自分たち 保坂 匠 青木方

[講演録]

小田

います。 的なイメージだと思っていただられている像ですね。これが一般な形の男の神様と女の神様が彫 さん少し考えてもらいたいと思 もそうなのかなっていうのを皆 して本当にそれはどこに行って 同じような状況なんですが、果た きたいと思います。神奈川県でも 居られます。もちろんその通りで 名な道祖神は長野県の同じよう くさんあるからで、最も日本で有 ですね。それはここ神奈川県にた 像を思い浮かべることが多いん らも二人の人が並んでいる石の 様、まあ男か女かわからないなが 方は、こういう男の神様と女の神 す。特に神奈川県内に住んでいる

東海道の宿などを描いた絵図な 詳しい方はこの『分間延絵図』と 延絵図』に当たりました。歴史に で記録として出てくるものはな べてみました。まず小田原市の中 記録に出てくるのはどこかと調 社と言っていますが、道祖神って 気付かなかったんですが、小八幡 いうのをご存知かと思いますが、 いかと、江戸時代の『東海道分間 村の絵図の中に、ここは小八幡神 んですね。この中に、今まで全然 さて、そもそも道祖神が最初に いてあったんですね。

> 一百六十七号 目 (令和三 次 三年十月号)

のが入ってこないようにするも

境にあって集落の外から悪いも

のだと思っている方がたくさん

小田原の道祖神と道祖神祭り

匠·····

1

£

小西薬局一二代目当主・小西正 和子…… 寬 7

明治小田原の記憶 (二)

短歌

旧小田原城主・大森一族とその末裔たち 田口 誠一:: 11

片桐

稔晴……

中村党の本貫地 鎌倉時代の小田原を巡る(二) 村 朋弘…… 16

北條五代記」 勝 四郎:... 20

秦野八沢・菖蒲行き 片岡日記歩こう会(二)

良 24

河津・赤沢・伊東篇 曽我物語を追っかける(三)

諸星 幸雄・・・・・ 28

小田原史談』 再録

西相模の石造物」(道祖神を抜粋

岡部 忠夫…… 31

小田原おしゃべり倶楽部 「片岡日記・昭和編」を出版します 27 19

新会員紹介・募集・・・・ 令和四年初詣予告…… 特別賛助会員·落穂集 32 11 23

三ヶ所、 碑の前に鳥居が建っている。これ ているものと、奥のほうですが石のようなものの前に鳥居が建っ と村の境界にあたる境の部分に らに気になったのは小八幡村に が道祖神と書いてありました。さ した。不思議なことだなと思 んですが、あと三ヶ所建っていま この『分間延絵図』を見ると現 つ建っているイメージだった 先程の一般のイメージだ いま

られるのですが、小八幡より先、八幡までは道祖神がたくさん見在の小田原市域、前羽の方から小 き忘れたのかどっちなんだろう りませんでした。無かったのか書 かれているものが一つも見当た 酒匂から風祭の間は道祖神と書



「東海道分間延絵図」東京国立博物館蔵



高田の双体道祖神



根府川の僧形単座像

と悩んでいただきたいと思 いま

ている道祖神の中で一番古いのればいいほうです。年代が書かれがありますが、そのうち二〇個あ がこの高田にある像ですが、その 田原市内に三○○ぐらい道祖神代を書いたものはあまりなく、小のと言われています。ただし、年 こういう信仰があったんだと考 二柱の神様を道祖神だと考えて 当時も二人の、二柱と言いますが です。小田原市内では一番古いも 年と書いてあるので一六七〇年 でいる石の像なんですね。寛文十 いたんですね。先ほどの 石で彫るということが行われて ら残っているものは確かにあり | だと詳しいところはわから 江戸時代にはもう 『分間延

> 川県の人たちはこういう道祖神 けなのかということですね。 五つの道祖神の類型 形を思い描くのですが、これ 先ほども申し上げた通り、

> > 形、お坊さんが座っている一体

豆

田

原市地域でも

伊豆半島

根府川の寺山神社にあるもの

ている像が建っています。二メー 先ほどの二柱の神様、 の道祖神の形があります。まずは ね。神奈川県内小田原の中心部の れも道祖神と呼んでいるんです トル近いものもあるのですが、そ はお坊さんが座って巻物を持っ 神」と呼ばれています。 それ以外には、伊豆半島の方で 実は小田原市地域には約五つ

道祖神なの?」となると思います。

「双体道祖 「これ 神奈 は一体置いてあるだけの道祖神うんですね。伊豆のお坊さんの像根府川の方だとちょっとだけ違 なっているのではないかと考え 男性の神様と女性の神様が並ん と呼ばれているところでは、伊 でいるものを意識した道祖神に 見てもらった双体道祖神と同様、 性が彫られているのです。先ほど の二体は髪が長く見えるので女 の隣にもう三体あります。真ん中 ですが、根府川のものはお坊さん で「僧形坐像」と呼んでいますが、 で丸ごとの像というのがありま にかかっている根府川片浦

られます。 ので紹介します。 した。これ以外にもまだあります 先ほど五つあると申し上げま

見られるんですね。 をされます。風祭・入生田の方に 聞いてみると道祖神という説明 っぱりわかりません。地元の方に 見ただけだと何を祀っているの これは石の祠ですね。これだけ 何の神様を祀っているのかさ

ますが、まとまって見られるのが原市内の色々なところで見られこの石の祠をしたものは小田 風祭・入生田それから箱根方面 箱根方面に多い道祖神だと思

わかります。

お稲荷さんの形をした道祖神

道祖神が一緒になったものがあ小田原市内にはお稲荷さんと を道祖神と呼んでいるんですね。 はまさに道祖神だということが していたということなので、これ は子供が道祖神のお祭りを運営 ないのですが、道祖神さんの場合 りするということはあまり聞か んは特に子供が講を作ってお参 たよということですね。お稲荷さ まり子供たちがこれを建てまし の脇に、この祠の右側なんですが、 の祠だとしか思いません。ただこ ります。これだけ見てもなんか木 お稲荷さんの形をした道祖神 子供中」と書かれています。 地元の人たちもこれ つ

では常に見られるわけではなく、 色でもお稲荷さんの形をした木 今のは板橋ですが、 この道祖神があります。こちら 東町、

ものです。

できます。これで四つですね。 街道に出してお参りすることが 一月十四日前後の土曜日曜のみ 神のお祭り、 つまり小正月、

奇石、 「隠れ道祖神

石祠道祖神

とかに造ったものだろうと思わ 祖神に見なしたと考えられます。 性女性の性にまつわるものを道 れます。陰陽つまり性ですね。男 みたら「これは縄文時代のじゃな 文化財課の学芸員さんに聞いて ろが伊勢原市にはあります。ただ れを半地下の住居の四隅に置い まさに男性のシンボルですね。そ 棒」といわれるものがあります。 ものです。縄文時代に実際に と、男性のシンボル・男根と女性 事に詳しい方が見るとすぐに分 ばれているものです。縄文時代の いね」と言われました。江戸時代 そちらの方で見られるのですが、 し、小田原地域の場合、沼代とか 道祖神として祀られているとこ す。その縄文時代の男根が実際に たり家の中に置いていたそうで のシンボル・女陰の石と呼ばれる かるのですが、それは何かという 実は特殊な事例もいくつかあ もうひとつの形は「奇石」と呼

です。

ね。 道祖神だからなんです 県内で一番多いのが双体 たが、 るものをイメージする。 様と女の神様が並 は道祖神というと男の神 最初の方にお話しまし 神奈川県の人たち んでい

ですが、双体道祖神の次もの。これも実際あるの うのもあります。 ほ す。ただ、文字碑は時代が に多いのがその文字碑で 自然石であったり、 に「道祖神」と書いてある その他にも文字碑とい ぼ確定していて、 ただの 石板

るものを紹介したいと思います。

その中で一番変わってい

これは曾我谷津の方で「隠れ道

「塞の神」と呼ばれている

木の洞の中にやはり男

ます。 そうです。ものすごい力を持って根が置かれていて祀られていた いということが記録に残っていいるからあまり大っぴらにしな 祠そのものに道祖神にまつわる ようなものもあるそうです が置かれていて祀られてい あとで説明しますが、 木の

> きました。 しては捉えにくいので今回は省 いうことで、信仰にまつわる形と 代末期からそれ以降に多いと

荷さん、奇石というものになりま それ以外は石の祠、 単体、

田原市内の七割が双体

が双体道祖神ということ域にある道祖神の約七割 そのうちの六五%が双体 祖神の形がありますが、に、五つないし六つの道 道祖神でした。小田原市 今までお話したよう

小田原市内地区别分布 30% 20% 10% 下府中 早川 曾比. 曽我 中村原 国府津 上府中 豊川 酒匂 足柄 大窪 小田原 下曽我 田島 片浦 木祠

田原市域ですね。 野部から曽我丘陵にかけての小 祖神が多いのは、だいたい足柄平 では判りにくいのですが、双体道 別に見てみます。パッと見ただけ 次にこれを小田原市内の地

像です。 んの格好をした単坐像がたくさ ほど述べたように伊豆型の単坐 く、箱根の方に石の祠、そして先 んあります。 足柄平野部に双体道祖 根府川片浦地区にお坊さ 神 -が多

ものというのもちらほら見られと女性のシンボルをかたどった れ、その間にちらほら文字の碑が す。それ以外の地区だとお稲荷さ るので、そちらに多いと思われま 先ほどの奇石型、男性のシンボル がたくさんありますが、その中で曾我丘陵の方には双体道祖神 んの形をしたものが、いわゆる御 旧小田原町周辺に多くみら

平成の道祖神

も後で少し説明をしたいと思い とても不思議なことですが、これ あるかなという程度なんですね。 ません。南町に二つ三つ文字碑が 御府内にほとんど道祖神はあり 面白いことに、 小田 京町内、

今回なんとなく分かったことが ずっと不思議だったのです が

年ぐらい前に道祖神が壊れたの

(明治時代で変わっ

だけじゃなく色々な信仰の碑が が安定した頃なんですね。道祖神 は江戸時代に入って庶民の生活 頃からです。一六五〇年というの たくさん建ち始める時期なんで それ以降現代まで続いているの す。そういう時期に建て始められ れたわけではなく一六五〇年 祖神はある時期に突然建て

こにはもともと別の道祖神が建 内に、ちょうど雪のかまくらの中 真ん中に少し窪みを造って、その 彫っています。これには年代は記 長野県上田市の道祖神を見ると、 のは長野の形なんですね。例えば 思うのですが、洞を造るっていう に男の神様と女の神様を祀って 自然石の真ん中を彫ってその中 に、新しい道祖神に出会いました。 元の人に聞いてみると、確かに十 に新しい道祖神があったので、地 し、一昨年歩いてみたら見るから てられていたはずなんです。しか れた道祖神の記録集によると、こ してないのですが、昭和に記録さ に二柱の神様が居るような形を いるので、 方たちと一緒に城山に行った時 ていただいているのですが、その の石造物を調べる会」の方にも来 は見つけました。今日は「小田原 最新の道祖神というものを私 確かに双体道祖神だと



平成の道祖神(市内城山)

があったのです。

道祖神があった

社があって御幣を立てていると、

「八幡・鹿島・天王・道祖神・・・」

十五日の両日でした。その中に末

てしまったのですが)

正月十四、

神が松原神社さんに合祀されて

と私は驚きました。道祖



長野県上田市の道祖神

も担っていたということになり ると総鎮守の松原さんが道祖神 すが『新編相模国風土記稿』を見 祖神は無いと言われていたので いたんだと。今まで御府内には道

ないので何とも言えないところ 明確に示す証拠は見付かってい とで、とても想像を掻き立てるわ とがこの相模の国では一般的で ますが、小正月(正月十四、 ですが、 祖神と所縁があるということを けです。ただ松原神社の例祭が道 に道祖神を祀っているというこ 原神社の例祭、正月十四・十五日 すので、この記述だけを見ると松 日)にお祭りをやられるというこ については後半部で説明いたし さらに言うと、道祖神のお 想像が膨らんできます。

祖神のイメージの中に長野の道いる、継続しているんですね。道現代でも道祖神が更新されて

代でも道祖神が更新され

れが一般的なイメージとなって 祖神が小田原にも入っていて、そ

作られたようなんですね。

「サイノカミ」「サエノカミ」

説明した形がある中で、 の名前が書かれています。先ほど カミ」と呼ばれています。 もともと「サイノカミ」 碑を読んでいくと色々な神様 道祖神と言ってますが 「サエノ 特に石 道祖神

が

鎮守松原神社についての記述 があります。その中に小田原の総 ってる方は誰もが知っている本 模国風土記稿』という、 というお話をしました。 あります。松原神社のお祭りは江 一個見つけたんですね。 松原神社に道祖神があった 先ほど御府内に道祖神が無い

歴史をや

しかし、 『新編相

ます。それ以外にも、「猿田彦命」 祖神」と書いてあります。ただこ ます。一番多いのはもちろん「道 名前が書かれている場合があり る場合があります。 せていた可能性ももちろんあり の道祖神を「サイノカミ」と読ま ゙ウズメノミコト」と書かれてい ・文字碑というものには神様の

ようです。 婦神を同 神と猿田彦・ウズメノミコトの夫 ても意味があるだろうというこ 話があるので、性のシンボルとし 外をちらっと見たのをきっかけ 戸の前で卑猥な踊りをして、天照 ます。このウズメノミコトは天岩 られます。また、猿田彦には奥さ ある猿田彦命の成り変わりと見 て来る時に道案内をした神様で 神様たちが地の葦原の国に降り 天孫降臨、 サエノカミは道の神様であり男 が発達したことによって道祖神・ とになります。そこで、この道祖 大神が天岩戸をちょっと開けて んがいてウズメノミコトと言い に、天照大神を外に出したという これは江戸時代に入って国学 柱の神様だということで、 記紀神話のなかで天の 視するようになった

がわかります。の碑は彫られて する神様として小田原の道祖神 確は彫られているということ こうして見ると、 道案内に関係

> 状況なのでしょう と思いますが、 道祖神が多 いうことは分かった のどの辺にどういう さて、小田原市内 県内でも全く同じ いのかと 神奈

神奈川県内の道祖神

小田原市域に三一一

る双体道祖神は、小多いだろうと思われですが、最初に一番 模川周辺ぐらいの平いたい県央地域、相 半島には全く無いの まり山岳地域や三浦 とが分かります。 野部に多いというこ 田原の平野部からだ に詳しく出てくるの 行っていて、 県で道祖神の調査を それ以外にも神奈川 調査されています。 です。神奈川県内で ○年ほど前に現状を 平塚市博物館が一 その中

はないのです。 すらどこへ行ってもあるわけで そもそも三浦半島には道祖神

は思っていたのですが、 どこにでもあるものだと私も昔 はありません。道祖神は日本全国 実はそう

相模の道祖神塔分布図 、本像 10~19 基基 20~2以上 30 石山 30 石山 30 石山 40 全 10~1 10 × 吳川 文字塔
 ○ 10 ~ 19
 ○ 20 ~ 29
 □石祠
 木稿
 本五輪・陰
 和荷 基基 陰陽石・自然石 _____) ~ 19 基) 基以上

『相模の道祖神』平塚市博物館(1999年)

っている像、また木の祠、石の祠半島に多いお坊さんが一人で座 見られます。 明治に建てられたもので各地に ります。文字塔というのは先ほど というようなものもちらほらあ ったように江戸時代末期から 先ほどご説明したように、 伊 豆

> 多いのは厚木市のようで三 町も多く、 の中でもかなり道祖神の多 れでも小田原市は神奈川県 占めています。ただし一番 って一〇%以上小田原市が ヶ所三一一基です。 中で小田原市内は約二五〇 約七二あります。 い地域だと言えます。大磯 六○基ぐらいあります。そ ○○あるそうです。その った石像や木の祠は約一 神奈川県にある道祖 狭い町域の したが

ンボルがたくさん見られます。 までこのような新しい男性のシ のですが、秦野から伊勢原あたり こういう奇石型と呼ばれるも サイノカミ」と言われている 奥に長細い祠があるのです とのかみ」と書いてあって、 無いのです。右手前に「ふな 神守護」と貼ってあります。 性のシンボルが石で彫られ どこを見ても双体道祖神は ていて、そこに御札が「道祖 神は祀られているのですが 、特徴的で、ここにも道祖 この中では秦野市はすご 開けてみるとまさに男

多いので、 井・中井・ もらったように曽我丘陵の方に は、小田原市域では先ほど見て 秦野・伊勢原あたりに この曽我丘陵から大

うことが何となくわかります。た のもたくさんあるんで、詳細には かけて多くあるんだろうなとい 未だ言えないところです。 だ、どうしても調べ切れてないも

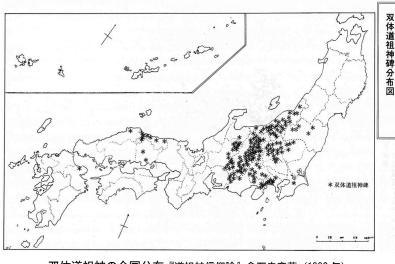
双体道祖神は富士川まで

県の人たちが一般的に道祖神と て日本全国ではどうでしょうか。 して思い描く双体道祖神はどこ **佘川県のことも分かりました。さ** 皆さんに最初お話した神奈川 小田原市のことがわかって神

> 限られた地域にしかありません。 のだということが分かります。 代に文化が移ったということが と鳥取に少し。鳥取の方は江戸時 関東甲信越ぐらいなんですね。あ にあるのかというと、実は非常に 分かっているので、その時代のも

です。富士川までがこの双体道祖 越えると突然無くなっているの から山北の方を抜けて静岡の方 に行くんですが、なんと富士川を 双体道祖神は神奈川県中央部 地域かもしれません。 つまり相模国の文化が入った

また、山梨の中央部には入 り、群馬・新潟辺が多くな のです。 すね。共通の文化を持って らず、長野県にたくさんあ いたところは一部だった っています。意外なことで



双体道祖神の全国分布『道祖神信仰論』 倉石忠彦著 (1990年)

「梨の道祖神

私の実家のすぐそばにあ 甲府市です。山梨県甲府市 実は私、出身地は山梨県

の上に丸い石がポンと置る道祖神ですが、石の台座 かと思ってたんですが、こ 供の頃一体これは何なの ものがあったんですね。子 ろに御影石を丸く切った ら歩いて五分程度のとこ っちに来て道祖神という いてあります。私の実家か

じん・フナトノカミなどと言って

ノカミ・どうろくじん・どうらく

名前がサヤノカミ・サエ

実はこれが道祖神だったというものに触れてから調べ始めると、 ことがわかりました。 れてから調べ始めると、

いる盆地部分にはこういう丸石の中央部平野部で窪地になって えはまったくありません。山梨県 の道祖神というのがたくさんあ ているようですが、私はやった覚 竹を立てて正月にお祭りをし



山梨県の丸石道祖神

講師紹介 保坂 匠 (ほさかたくみ) 小田原市郷土文化館学芸員

談会セミナー」講演内容を基に編集 MECOにて行われた「小田原史 なお本稿は、二○一九年十月五日 (編集担当:青木、荒河

沖縄には石敢當というまた別の域なので一箇所しかありません。

域もあります。北海道は新しい地あるのですが、全く見られない地

見されます。至るところに確かに 祖神というものは日本全国に散 日本全国を見渡すと

次号につづく)

日本全国を見渡すと、

ものがあります。ちょっと面白い

うものがないそうなんです。 のが九州の南のほうにはそう

全国に見られているんですけ

いるそうです。

とを道祖神と呼んでいる地域も 彫ったもの、またお地蔵さんのこ ません。本当に少ししか無いよう でも道祖神があるわけではあり です。神奈川県ほど過密にどこに 社であったり、木の祠があったり あります。関西の方に行くと、神 の方に行くと、 信越、それ以外の地域では、 るんですね。双体道祖神は関東甲 神に対して色々なイメージがあ このように全国各地には道祖 木で男性の男根を 東北

僧形道祖神の文化、相模の双体道 なっているということです。 市域には伊豆の単体道祖神、単体 の南端部分に位置し、また小田原 一神の文化が交わる境界部 小田原というのは双体道祖神

明治小田原の記憶(二)

小 西薬局 二代目当主·小 西

令和3年(2021年)10月

さたつ)である。正寛は小西家一 四代目今井徳左衛門となる人で 二代目の当主となる人、正植は一 子は正寛(まさひろ)と正植 っている。女子はよしとたみ、男 夫妻には四人の子の存在がわか いて話を進めることにする。この は正蔭・房子夫妻のこども達につ 西正蔭についてふれてみた。今回 回は小西薬局一一代目の

四郎となる。

西正蔭の娘たち

活躍した人物である。 銀行取締役など、政治経済方面で 社社長、沼津銀行頭取、静岡農工 表的な政治家でもあり、沼津通信 会議員として県内改進党系の代 となった宜歳の長男で、世襲名伝 和田歳貢(としつぐ)へ嫁した。 貢は正蔭の兄で和田家の当主 よしは正蔭の生家である沼津 雅号を鷹峰といい、静岡県

和の後見人として小西家の経営 た大清水、清水金左衛門の娘であ の母みのは小田原の本陣であっ 小田原との関係でいえば、歳貢 歳貢は小西正寛亡き後若い正

郎も応援に駆けつけたという。 題には蓮正寺の小澤衡平や武四 は小西家と養子縁組して小西武武四郎と結婚するが、後に武四郎 在の厚木市戸室)の霜島久円の子 にも深く関係した。 たみは愛甲郡南毛利村戸室 (現

中・高座・愛甲・津久井郡の意見 は厚木中学校舎建設地をめぐり、 郡の民権結社相愛社の副社長に ちの一人で、明治一五年には愛甲 業改良に捧げた。特に愛甲郡の自由民権運動、地方行政、教育、農 迎えた。旗本興津氏の名主役を一 の位置に決定したという。この問 は知事・郡の調停をはかり、 が一致できず難航した際に、久円 した。明治三三(一九〇〇)年に 就任するとともに自由党に入党 国会開設請願の惣代一四名のう 会議員の同期である。また相模国 川県会議員をつとめ、正蔭とは県 二(一八七九)年から一八年神奈 由民権家としては有名で、明治一 年生まれで、三一歳で明治維新を 代に亘ってつとめ、後半生を自 霜島久円は天保七(一八三六)

> 市制施行に尽力)、小田原青年聯 員、小田原振興会副会長(小田原 つ事になった。後の小田原町会議 してその経営に深い関わりを持 字町に移り、小田原通商銀行支配 営んでいたようであるが、小西家 三郎氏はこの夫婦の長男である。 種保険代理店を経営、小西分家と 人、小田原倉庫運送株式会社、各 の家業が多角化してきたため十 合団団長、県会議員となる小西尚 武四郎・たみ夫婦は結婚当初は 醤油製造業を

小西正寛の履歴書から

員、現在の職業運送業(内国通運 は三等郵便局長・元所得税調査委 の履歴書によると、明治一八(一 する。小西家に残されている正寛 月に正蔭・房子の長男として出生 業となっている。この履歴が何の 会社小田原代理店) · 薬舗兼薬種 八八五)年一月家督を相続、官職 正寛は安政元(一八五四) 年九



小西正寛

学歴の詳細が記されているので 為に作成されたのかは不明だが、 紹介することにする。

一つ一つ検証していくことにす 田家の影響が顕著に見て取れる。 たことがわかる。父正蔭と沼津和 のではなく、沼津を根拠にしてい 寛は地元小田原で教育を受けた その前提としてわかることは、正 この記述を繙いていくと、まず

沼津で漢籍を学ぶ

記官となる人物である。 かもしれぬ。後に渡辺は奈良県書 治になってから開塾したところ 沼津市)や平井村(函南町)は明 置となっているので、戸田村(現 その塾の位置は宿場に接する位 ○○名を超す生徒がいたという。 子弟就学スルモノ少カラズ」で一 た沼津藩士で、私塾渡辺塾を主宰 であるが、渡辺は足軽から出世し る。最初に漢籍を教わった渡辺孝 村で漢籍の教授を受ける事にな 就き伊豆国戸田村ならびに平井 明治元(一九六八)年渡辺孝に 『沼津史料』によると「市中ノ

の指導を受けるとなっている。 明治三 (一八七一) 年沼津で漢学 次に師事したのは田辺太一で、

習所に学び幕府外国方に召し出 輔の次男で、昌平黌、長崎海軍伝 田辺は儒学者で幕臣の田辺誨 慶応三 (一八六七) 年パリ

在籍中に学んだのであろう。 作国後は幕臣としての地位を を発し、同三年一月には外 を、明治二年一月沼津兵学校が 、明治二年一月沼津兵学校が開 を、明治二年一月沼津兵学校が開 を、明治二年一月沼津兵学校が開 を、明治二年一月沼津兵学校が開 を、明治二年という記述に をみても、明治三年という記述に は誤りがあるのかもしれぬ。おそ は誤りがあるのかもしれぬ。おそ は誤りがあるのかもしれぬ。おそ は誤りがあるのかもしての地位を

性理学を学ぶ

に下総国長部村遠藤亮規に性理との後明治四(一八七一)年再で渡辺孝の元に戻り下総国菊間び渡辺孝の元に戻り下総国菊間が渡辺孝の、菊間神工佐々木得三へかたわら、菊間藩士佐々木得三へかたわら、菊間藩士佐々木得三へかたわら、菊間藩士佐々木得三へが大わら、菊間本新により徳川宗家の駿河移住にあたり沼津藩主水野忠敬は菊間へ二万三〇〇石を与えられ転封となったからである。同五年にいったん帰国後、直、大学の後明治四(一八七一)年再で渡辺孝の後明治四(一八七一)年再で渡辺孝の元に戻り下総国東間である。

沼津にある明治史料館の「明治 四月二〇日入門してい 大高田宜和(よしかず、正蔭の兄) 大高田宜和(よしかず、正蔭の兄) 大高田宜和(よしかず、正蔭の兄) 大高田宜和(よしかず、正蔭の兄) 大高田宜和(よしかず、正蔭の兄) とともに四月二〇日入門を果た とともに四月二〇日入門を果た とともに四月二〇日入門で果た とともに四月二〇日入門で果た とともに四月二〇日入門で果た とともに四月二〇日入門で果た とともに四月二〇日入門の別で である。正寛はおそらく父正 る」とある。正寛はおそらく父正 る」とある。正寛はおそらく公正 る」とある。正寛はおそらく公正 であろう。



和田伝太郎歳貢(鷹峰)

全般を指導、そのための嚮導所を性理学は天保期の農政学者での教育やしつけにまで及ぶ生活の教育やしつけにまで及ぶ生活の教育やしつけにまで及ぶ生活の教育やしつけにまで過剰するための独自の実践道徳を説いるための独自の実践道徳を説いるための独自の実践道徳を説いるための独自の実践道徳を説いるための独自の実践道徳を説いるから、本述を一人をつかった大原幽学(一七九七~一八あっための嚮導所をといるが、神道・「大原」といる。

幽学は自殺に追い込まれた。が勘定奉行の取り締まりにあい、んため村を越えての農民の往来た。しかしこの幽学の指導を受けた。しかのが長部村の遠藤家であっしたのが長部村の遠藤家であっ

『明治小田原町誌』明治六(一里に性理学と称し大原幽学氏の国に性理学と称し大原幽学氏のすをすを目的となす学徒の一団がなすを目的となす学徒の一団がなすを目的となす学徒の一団があり、此の教を信ずる者各地に増あり、此の教を信ずる者各地に増あにては現政治に不軌を企図するものと誤認せられ、足柄裁判所るものと誤認せられ、足柄裁判所るものと誤認せられ、足柄裁判所るものと誤認せられ、足柄裁判所を性理学に托して不軌を企図するものと誤認せられ、足柄裁判所としてが、三幣玄、堀江勇、小西正蔭率い、三幣玄、堀江勇、小西正蔭率い、三幣玄、堀江勇、小西正蔭本しも程なく事理判明し、晴天白世しも程なく事理判明し、晴天白

いるようであったから思想に通ずるものであったから調和を説く二宮尊徳による報徳れは幽学の思想が道徳と経済の

薬舗として薬学の道へ

明治七年(一八七四)八月正寛 明治七年(一八七四)八月正寛 歴 中村良春に代わったと履歴 となり、指導者は東京司薬場へ通学 日マルチン氏は任期満了で解職 となり、指導者は東京司薬場へ通学 となり、指導者は東京司薬場へ通学 となり、指導者は東京司薬場へ通学 となり、指導者は東京司薬場へ通学 し、ドイツ人マルチン氏に薬学のし、ドイツ人マルチン氏に薬学のし、ドイツ人マルチン氏に悪声で解職 となり、指導者は東京司薬場でいる。

正寛の通った東京司薬場というのは、明治七年三月新政府が東京に設置した保健衛生行政に関京に設置した保健衛生行政に関する機関で、現在の国立衛生試験所の前身である。当時は粗悪な輸所の前身である。当時は粗悪な輸所の前身である。当時は粗悪な輸所の前身である。当時は粗悪な輸所のできるための準備にかかり、受験では内務省へ所管替えとなった。には内務省へ所管替えとなった。には内務省へ所管替えとなったが、その後鉱泉、飲料水、食品等の分析の後鉱泉、飲料水、食品等の分析の後鉱泉、飲料水、食品等の分析の後鉱泉、飲料水、食品等の分析の後鉱泉、飲料水、食品等の分析のである。当時は粗悪なり、

と願書を四月二〇日迄に差出す を許可するので、志願者はその区 五歳以上の者五〇名を限り授業 ることになる。その内容は、 の戸長または確実な証人の添書 薬品実地試験を伝習するから、一 こととなっている。 日から土曜日を除く毎日午後 五月

泉試験の嚆矢であったという。 のマルチン氏は明治八年七月一 者でもあった。余談になるが、こ 東京司薬場開設当時からの指導 もあり、 したことで名の知られた医師で 策に活躍し、東京に衛生会を組織 肇は、後に明治一二年のコレラ対 った。証人であったであろう高槻 五月一日から通学することにな 分析試験をしており、現地での鉱 日足柄県に出張し、箱根温泉の 正寛はこの募集に応じ合格し 御雇外国人マルチン氏は

になって神奈川県で薬舗試験に 科が開設されたため、明治一○年 合格し、内務大臣より薬剤師の免 し、明治一九年(一八八六)五月 六月で打ち切られた。正寛は帰国 ことと、東京大学に医学部製薬学 ところが東京司薬場での伝習 試薬業務が多忙となってきた

大矢みねとの結婚

は高座郡栗原村 (一八七五) 一二月一日、 東京司薬場に入る前の明治八 (座間市) 正寛

(9) 第267号

原藩も安政四(一八五七)~明治模の弥市」と呼ばれていた。小田枝ずけられる程の資産家で、「相 四年にかけて一万七六〇〇両に は一八人扶持を給付されている 及ぶ大金を大矢家から調達して 丸長者富貴鑑」という長者番付に は代々弥市を名乗り、「関八州持 弥一の娘みねと結婚する。大矢家 など、小田原とは深い縁があった。 いた。すでに天保四年には大矢氏



大矢弥一

企業家としての出発

としての心得を漆で塗られた鍵 付きの文箱に入れ、正寛に渡して なる。相続にあたって父正蔭は、 寛は家督を相続、小西家の当主と 先代からの家産書上、小西家当主 明治一八年(一八八五)一月正

業のほかに、運送業(内国通運会 な面での活躍はみられないが、明正寛は父正蔭のように政治的 足柄県時代から殖産興業として 社小田原代理店)や三等郵便局、 治一○年代からは薬舗以外の事

> 野沢太七と共同で経営した織 経営があげられる。 (創意組織会社、 織物業) の物

通商銀行の設立など、民間活力の伝活動を開始した。さらに小田原観光保養地としての小田原の宣 邁進していく。それぞれについて 検証を加えることにする。 利用による小田原町の振興策に 土地周旋、小峯梅園の整備など、 に入ると、鴎盟館を初め別荘への 家督相続以降の明治二〇 车

創意組織会社の経営

の県令(知事)を勤めた韮山の柏されているわけではない。足柄県の会社に関しての資料は余り残 創業資金を借入している証文があり、小西家にはこの野沢太七が と、実質的な経営者は野沢太七で 就任していることがわかる。 寛は資金の提供者として社長に 残されている。これをみると、正 木家に残されている史料による 社ではあるが、現在小西家にはこ 正寛が社長となる創意組織会

助者であった足袋職人の中津 製糸場に派遣した工女のその後この野沢太七は足柄県が富岡 に改造した。この細淵はすでに 細淵寅吉という発明家が富岡 糸場を設立している。製糸機械は 治二年には機織器械を発明し、 の就業の場として明治九年に製 (屋号は葉婦屋) 川援明 型

> ている。 もに板橋村で工場を開設したも ○円、製造額一○○八円と記され よると、組織会社は資本金二三五 四年(一八八一)の『統計書』に のと思われる。神奈川県の明治一 の製造を手がけていて、 野沢とと

埼玉、名古屋方面にも及んでいる。 したことは賞されることであろ を製造、その後商圏は広がり東京、 は明治三○年代から「五金足袋_ 資金面から地域の企業に貢献 中津川藤吉の子中津川金五郎

田原通商銀行の設立

行と小田原通商銀行は士族と商 力と新興勢力の対抗であろう」と にたいして、小田原通商銀行は 来の伝統的商人が中心であるの 原銀行が小田原町の江戸時代以 差異はない。しいていえば、小田 みるかぎりでは職業別にさほど 人の対立ともいわれるが、役員を 市史』通史編では「従来小田原銀 この二つの銀行について『小田原 年、社長今井徳左衛門)があった。 て改組した小田原銀行(明治二六 積小社から近代的金融組織とし 地方に二番目に開業したのが小 有力者を背景にしている。伝統勢 明治三〇年 (一八九七) 小田 原町の新興商人と近隣の地主 原通商銀行である。小田原には

令和3年(2021年)10月

車鉄道設立にかかわった小 設けられた。この旅館は小田原馬

田

るようになる。小田原海岸沿いに

暑地の重要な要素にもりこまれ たが、この頃になると海水浴が避

は鴎盟館というリゾート旅館が

業式の挨拶文の草稿の中でこの 一当地へは他の地方の銀行 かし、 設立者の正寛はその

銀行 いる。 為に利益であるとしている。最後 のが二つ以上あることは土地の えるのも困るが、土地に相応のも あるのも、信用できないものが殖 が便利」である。しかし余り多く ばならない」し、「二つ以上有るの めば」「金融機関が拡張しなけれ も重複している者も有る。 あるという。株主は小田原銀行と は採らない所謂公利公益主義」で 共に利益を少なくする様な拙策 もしれぬが、「銀行は競争をして るかと思う」と考える方もあるか 原銀行があり「競争的障害を与え 一方では、小田原にはすでに小田 取られてしまうというのである。 ことによって当地の利益が吸い る)にては金融上に不弁理」であ 地の人口と資産に対し一か所の 立が相次いでいたことを示して ありました」。これは明治二六年 行より支店を置くとした計画も 出張店を設けたり、又或る地方銀 土地に農工商諸般の業務が進 部施行により各地で銀行の設 銀行条例」の施行や明治商法の 「世の進むに従て社会は私に利 かつ他地方の銀行が入り込む (小田原銀行をさすと思われ 小田原町は人口も多く「当 抑も

> に相互の利益を計ろう」と思うと 「是から公明正大に諸君と共

> > 力商人達が運営にかかわ

藤

開

年(一九〇〇)には純益約一万三 商銀行は設立三年後の明治三三 寛の予測の通り、小田原の経済界小田原のこの二つの銀行は正 であったことがわかるし、世の風あるかを十分に認識しての挨拶 生活に役立てる啓蒙活動を行っ 田原町の人びとに貯蓄を勧めて ○○○円を計上している。また小 を牽引することになる。小田原通 を読んでいたともいえる。 ことがわかる。近代的銀行が何で 経済の進展を図ろうとしている る小田原銀行とともに、小田原の である今井徳左衛門が社長であ ている。同年には貯蓄高も約三万 ていたような対抗ではなく、 これらからみると従 来い 実弟 われ

43,

柳

盛んに行われていたことがわか

いて、正寛とは漢詩のやりとりが の野村家文書は巻子本となって 家文書にも見ることができる。こ 政資料室に収蔵されている野村

るものとなっている。

寛の

伊藤十蔵書簡

女孩住九中からは明

以より全人三四五二年 おらるとなるかりそう 十日方 為是一書住 (1) 何及十名 理者

別荘を建設

を借用して 海岸御料地 でであるか、

公舎に恐ら

湯治を中心とした避暑地であっ

ようになる。箱根は従来型の温泉 別荘地、避暑地として注目される

> といった別荘が相次いで建博文の滄浪閣や野村靖の黄 ていた。さらにこの周辺には伊 小田原上幸田に父十蔵の居宅と れることになる。 伊藤博文は海岸別荘建設前に 建設さ

> > き継いでいる。野村と正寛との交

流については、

現在国会図書館憲

は分家であった小西武四郎が引ることになる。これは正寛亡き後

ともに、野村の別荘管理を任され

して夏島の別荘を移築していた。 正寛はこの十蔵と親交があり、現

村とは日あなる しゆヨンころるまけると きるとうると 學面面近去 れている。 在小西家に

令でもあり、 の神奈川県 入された時 奈川県に編 足柄県が神 また野村は 簡が保管さ は十蔵の書

> り、その跋文を野村靖が記してい ることはなかったようで、 る。ただ残念なことに活字化され 遺稿集を発刊の計画が持ちあが 小西家に保存されている。 明治三七年 (一九〇四) 正

小田原按内記』 の出

園として整備している。 た。そこで小峯に梅を植樹して公 の観梅が季節の行事になってい の桜花を愛でるのと違い、旧暦春 推賞している。当時の花見は現在 したほど、梅を観光の目玉として 正寛は自らの雅号を「湖梅」 ع

には、小田原の名所・旧跡をはじ 九年 (一八九六) に出版された 『小 クを作成している。それが明治二 るための現在で云うガイドブッ れたため、正寛は小田原を紹介す .原按内記』である。この小冊子 別荘は避寒地としても利用さ 小田原は箱根と違い海岸近く 伝承などが盛り込まれ、

借用を肩代は御料地の

伊藤博文・野村靖との交流

明治二〇年前後から小田

原は

円に達した(小田原通商銀行

いる。

また「版権」が設定されて

いることも注目される。

数載せられ、明治の中期の小田原の土産物を扱う商店の広告も多

が髣髴させられる内容となって

内

記

Ħ

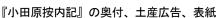
書

店

後光

が伝 家業の経営に関しては沼津の和 嗣である正和は千葉医専 四歳の若さで急逝した。この時継 八九八)一〇月突如腸チフスで四 葉大学)薬学科に在学中であり、 伝太郎鷹峰と分家小西武四郎 かし、正寛は明治三一年 和の後見人としてあたって (現在の







りて済生堂小西薬局本店様に御 本店 とは、正寛にとってさぞかし の小田原 (二)」でお話しした内容 であったことであろう。 礼申しあげる。 に加筆したものである。紙上を借 この稿は二〇二一年三月二八日 「街かど博物館・済生堂小西薬局

ミニセミナー

明治時代

天・岩崎宗純 小西家資料 参考文献 『図説沼津兵学校』沼津市明治史 『沼津市史』通史編近世 『小田原市史』 『明治小田原町誌』 「沼津市明治史料館通信」 『小田原地方商工業史』 『小田原市史』史料編近代I 通史編近現代 内田哲 14 号

料館 『座間市史』 5 『幕末外交談』田辺太一 東洋文 通史編上

『国立衛生試験所百年史』

会員の方へのお願い

済を担う様々な企業が道半ばで銀行経営はじめ小田原町の経

見届けることができなかったこ

いる。

新会員募集

申し込みは史談会役員または左記 ていただくよう、お誘いください。 味をお持ちの方にぜひ会員になっ 募集しております。郷土の歴史に興 へ連絡願います。 会費は年額三千円です。 田原史談会では常時新会員を

斉藤

佳典

小田原市南町

〒二五〇-〇二六六 電話〇四六五- 四三- 九八〇三 小田原市曽我原五三八-六 諸星 幸雄

新会員紹介

中村 御名前 條二 (敬称略) 小田原市早川 御住所

勲 小田原市永塚

小林

カット・内田美枝子

短歌 落

鮎

田 誠

剪定の手を止め松の下道を紅き日傘の過ぎ行くを待つ

水面を撫づるがごとく黒鷺の夕べの川に落鮎漁る

空青く赤きあきつは透きとおる翅に悠々人の世隔

ゴムシート広げるような音のして 鶫 一斉に畑舞い上がる

与野党の格差広がる議事堂をモノトーンに照らす秋の月光

旧小田原城主・大森一族とその末裔たち

片桐 稔晴

じめに

は「大森」である、と自己紹介さは「大森」である、と自己紹介されたことから始まります。 その時その人物は、自分の名前その時その人物は、自分の名前その時その人物は、自分の名前その時その人物は、自分の名前その時その人がは、私が「旧小田原城主・大森一族私が「旧小田原城主・大森一族をから話しかけられ、ある用件をらから話しかけられ、ある用件をらから話しかけられ、ある用件をらから話しかけられ、ある用件をらから話しかけられ、ある用件をらから話しかけられ、ある用件をらから話しかけられ、ある用件をらから話しかけられ、ある用件をらから話しかけられ、ある用件をらから話しかけられ、ある用件をらから話しかけられ、ある用件をを対している。

早雲によって城を乗っ取られた脱『箱根の坂』に登場する、北条のです。つまり、司馬遼太郎の小けてきた意味にやっと気づいたけてきた意味にやっと気づいた彼が「小田原在住の私」に話しかるが

組み、新たに「諸霊位」、「家系図 であり、彼の亡き父忠道氏と叔父 えた〔手書きの史料集〕を作成し 譜、その他記載事項の補記」を加 や「家譜」などの復元作業に取り 失してしまった伝来の「家系図_ の忠政氏が先の戦争の渦中に焼 力・保存、さらに印刷することを たので、それらをパソコンに入 は、自分が「水戸大森家」の末裔 い出してくれた私に向かって、彼 とを思い出したのです。 私に依頼してきたのです。 「末裔の一人だったのです。 彼は、「旧小田原城主・大森一族 やっと自分の一族のことを思 そしてそ

森氏系図」に付記されています。森氏系図」に付記されて「(水戸) 大家譜」などの復元作業は、茨城「家譜」などにもとづいて行なわれ府系纂」、『大森氏系図』(大森信氏府系纂』、『大森氏系図』(大森信氏府系纂』、『大森氏系図』(大森信氏府系纂』、『大森氏系図』(大森信氏方法)などにもとづいて行なわれたことが、復元された「(水戸) 大家議)などにもとづいて行なわれる。

すぎた話だ」くらいにしか受け止場が大森で名前が大森とは出来

す。しかし、私は最初のうち、「会いか、と彼は期待していたようで

めていませんでした。

思い当たることがあるのではな

けば、小田原在住の人間であればれました。そして、その名前を聞

旧小田原城主大森一族について

族とその末裔たち」に関心をもこうして「旧小田原城主・大森

旧小田原城主・大森一族」のこ

で大森一族の興亡について記した。そして、そこで私が最初にした。そして、そこで私が最初にした。そして、そこで私が最初にした。そして、そこで私が最初にした。そして、そこで私が最初に手にした本が『小田原市史 通史 一一で大森一族の「第四章 大森氏の時代」のその「第四章 大森氏の時代」のその「第四章 大森氏の時代」のその「第四章 大森氏の時代」ので大森一族の関するに、「手書きのつことになった私は、〔手書きのつことになった私は、〔手書きのつことになった私は、〔手書きのつことになった私は、〔手書きのつことになった私は、〔手書きのつことになった私は、〔手書きのつことになった私は、〔手書きのつことになった私は、〔手書きのつことになった。

そして、それによれば、駿河国 そして、それによれば、駿河国 416)十月に起こった「上杉禅 416)十月に起こった「上杉禅 5の乱」であった、とのことでした。「前の関東管領・上杉禅秀の乱」であった大森明、対大 10の人間、 20人間、 2

た。彼は「族的支配を止揚して、四代目の大森氏頼(寄栖庵)でし盛期を築いたのが、小田原城主・盛期を築いたのが、小田原城主・

られています。地域を含む広範囲な地域権力を地域を含む広範囲な地域権力を地域を登む広範囲な地域権力をを受けようとし、「小田原ををしている。

基本的な史料は皆無に等しい」と。 とかし、この小田原市史第四章 にっています。例えば、「その氏頼が明ています。例えば、「その直後の明でいます。例えば、「その直後の明で三年(1494)九月とされる高三年(1494)九月とされるが立への関与や、伊勢宗瑞によの対立への関与や、伊勢宗瑞によが存在するが、それらに関するとが存在するが、それらに関するというである。

◆参考

旧小田原城主大森氏の略系図

(五代) ——藤頼 (六代) 頼 (三代) ——氏頼 (四代) ——実頼頼明 (初代) ——頼春 (二代) ——憲

次郎氏の『小田原市史料 上巻次郎氏の『小田原市史料 上巻という先の指摘を念頭に置きなどいう先の指摘を念頭に置きながら、小田原退去後の大森一族の動向について記した文献を探し動向について記した文献を探し動向について記した文献を探し動向について記した文献を探し動について記したの後の事態解明が返済料室で見出したの後の事態解明が

歴史篇』でした。その「第六章 大歴史篇」でした。その「第六章 大歴史篇」でした。その「第六章 大歴史篇」でした。その「第六章 大田原没落後の大森氏」において、中野氏は次のように記しなったが、北条早雲の攻撃は続き、依ったが、北条早雲の攻撃は続き、依ったが、北条早雲の攻撃は続き、依ったが、北条早雲の攻撃は続き、依ったが、明応七年(1498)にはこの城もついに陥って一族ではこの城もついに陥って一族と

[散後の大森一族の動向

と。

頼照と承けて、頼照のとき……頼照と承けて、頼照のとき……頼照と承けて、である。まず江戸大森氏について、「藤頼の兄実頼の子彦について、「藤頼の兄実頼の子彦について、「藤頼の兄実頼の子彦について、「藤頼の兄実頼の子彦について、「藤頼の兄実頼の子彦について、「藤頼の兄実頼の子彦について、「藤頼の兄実頼の子彦について、「藤頼の兄実神の子彦について、「藤頼の兄実神の子彦について、「藤頼のとき……っと言ったが、武田氏が積極的な援いで、表について、順次に次のように系統について、順次に次のように

江戸に出て徳川秀忠に仕え 江戸に出て徳川秀忠に仕え でも相当豊かであったの 済面でも相当豊かであったの 済面でも相当豊かであったの を駿河の小山に移して生土乗光 を駿河の小山に移して生土乗光 を駿河の小山に移して生土乗光 を駿河の小山に移して生土乗光 を下が、代々江戸幕府の旗本とし て続いた江戸に住む大森氏であ

のように記しています。「水戸大森氏です。この点についても、次 郷を退去して同国の田島村に移 82) 十二月、甲府城主武田萬千 君慶があったが、慶長七年(15 を祖先としている。頼慶の子君安 これが甲州の大森氏である」と。 で滅亡したので、彼は・・・・・浅利 582) 三月、武田勝頼が天目山 郷に住んだ泰頼の次男に頼慶が 次のように記しています。「浅利 従って甲州を出て水戸に移った。 主に転封された時、両人はこれに 森家は、甲斐大森家と同じく頼慶 の時より長くこの田島に土着し った。そして、氏持の子与左衛門 その子氏持のとき、天正十年 して、止まって父の跡を継いだ。 あった」。この「頼慶は武田氏に属 て武家を捨てて帰農した。・・・・・・ そして、三番目の系統が水戸大 続いて、甲斐大森氏について、 (徳川家康の第五子)が水戸城

> ある」と。 臣となった。これが水戸大森氏で 三人はこれに仕えて、水戸家の家 二人はこれに仕えて、水戸家の家 ちに徳川頼房が城主になった時 翌年の慶長八年に没したため、の

の大森家だけは一六代藤頼の子から出ているのであるが、備中住の諸家はみな一五代実頼の系統 とされている」。そして、その子孫 に逃れ、ここにおいて世を去ったたのち、三浦義意を頼って新井城 図によると、藤頼は眞田城を落ち孫であるとされている。同家の系 考を発見しました。そして、その 例にしたがって「頼忠」)氏の諸論 っていますと、さらに大森尚 って驚きました。しかしなお、先 たものがあることに、私は正直い この家は、神戸に住んでいる」と。 集めた大里正となって、名望家と この事業の中心力となり、大きな であったので、その開拓団に身を 新田開発の事業が起きていた時 定着した備前国は、児島湾干拓、 が「諸国流転の辛酸をなめた末に ように記しています。「さて、以上 この点についても中野氏は、次の いて、これほどまとまって書かれ して知られて明治に至った。現在 以降は帯江、早島その他数か村を 業績を挙げたのである。それから 投じた大森家は数代のあいだに 小田原図書館地域資料室に通 四散後の大森一族の動向につ 最後の系統が備中大森氏です。

「大森」という苗字からも分かる「大森」という苗字からも分かるであることも分かりました。彼裔であることも分かりました。彼裔であることも分かりました。彼路はこうした立場から、足柄史談会の機関誌『史談足柄』を舞台にしていくつかの論考を発表しています。また、のちほど取り上げるます。また、のちほど取り上げることになっている「岡山県下の大ます。また、のちほど取り上げることになっている「岡山県下の大本氏――早島大森氏を中心として」という論考を、『高梁川37号』で、一大森」という論考を、『高梁川37号』で、一大森」という論考を、『高梁川37号』

ご自身が「代表幹事に」に就くと 森氏一統系図」つくりと併行して 作成しています。そして、この「大 に整備し、「大森氏一統系図」をも 後の大森一族の家系図を今日的 なものとして、彼は、小田原退去 す。また、これらの活動と一体的 った郷土史誌で取り上げられた 殿場市史』、『小山町史』、『南足柄 では『高橋村誌』、『裾野市史』、『御 の諸論考を発表する一方で、「地 忠記』では、引き続き大森氏関係 せん。ご自身の半生を省みた『頼 これにとどまるものではありま いったように、多彩な活動も続け 大森関係の記述を収載していま 市史』、そして『小田原市史』とい 万史に見る大森氏」と題する論考 「小田原大森氏同族会」を組織し しかし、大森頼忠氏の活動 ば、

実は、「私の知る大森氏」がこの

「小田原大森氏同族会」のことを「小田原大森氏同族会」のことを知らない様子でしたので、知人を知らない様子でしたので、知人を知らない様子でしたので、知人を知らない様子でしたので、知人をおしたが、その後に無事に退院さあって多少の時間の経過があります。その時間の経過があります。その後に無事に退院された頼忠氏ご自身からお葉書をれた頼忠氏ご自身からお葉書をれた頼忠氏ご自身からお葉書をれた頼忠氏ご自身からお葉書をれた頼忠氏で自身からおました。

水戸大森家についての補記

を試みたいと思っています。を試みたいと思っています。を試みたいと思っています。そして、私に紹介したような諸史料や諸でに紹介したような諸史料や諸でに紹介したような諸史料や諸でに紹介したような諸史料や諸でに紹介したような諸史料や諸でに紹介したような諸史料や諸でに紹介したような諸明で、水戸大森の記述に「追加的な補記」をする必要性を、私は感じたのでをする必要性を、私は感じたのでをする必要性を、私は感じたのでをする必要性を、私は感じたのでをする必要性を、私は感じたのでをする必要性を、私は感じたのでをする必要性を、私は感じたのとして、とて、からないと思っています。

家は、甲斐大森家と同じく頼慶をうに記していました。「水戸大森この点について中野氏は、次のよまず、水戸大森家についてです。

これが水戸大森氏である」と。 祖先としている。頼慶の子君安、 程度があったが、慶長七年(15 を2)十二月、甲府城主武田萬千 代が水戸城主に転封された時、両 代が水戸城主に転封された時、両 代が水戸城主に転封された時、両 代が水戸城主に転封された時、両 代が水戸城主に転封された時、両 代が水戸城主になった時二人はこれに 社えて、水戸家の家臣となった。

こうした記述に対して、水戸大 森家の「家譜」によれば、次のよ うに記されています。すなわち、 うに記されています。すなわち、 君安は「初め萬千代君に仕え」て いたが、甲府城主萬千代(元服し て信吉)が水戸城主になったため 水戸に移り、これに仕えて甲州か ら水戸に移り、これに仕えて甲州か ら水戸に移り、これに仕えて甲州か の第十一子長福(元服して水戸 でに信吉が没してのち、「慶長十 でに信吉が没してのち、「慶長十 でに信吉が没してのち、「慶長十 の第十一子長福(元服して水戸 初代藩主頼房)に駿府で奉仕」す ることになった、と。

そして、君安の家督では触れていません。

そして、君安の家督を継いだのそして、君安の家督を継いだのよ後で、彼は父君安とはその子の忠俊で、彼は父君安とはその子の忠俊で、彼は父君安とはその子の忠俊で、彼は寛永八年に頼房の政であり、彼は寛永八年に頼房の政であり、彼は寛永八年に頼房の長男頼重(水戸第二代藩主光圀の長男頼重(水戸第二代藩主光圀の長男頼重(水戸第二代藩主光圀の長男頼重(水戸第二代藩主光圀の長男頼重(水戸第二代藩主となり高松藩主となり高松藩主となり高松藩主となります。そして、君安の家督を継いだの

この忠政に二人の男子があり、この忠政に二人の男子があり、に、高松藩主徳川光圀の養嗣子常が水戸藩主徳川光圀の養嗣子常が水戸藩主徳川光圀の養嗣子常が水戸藩主となります。また、忠政の次郡士となります。長男は次も高松から水戸に移るのに従って、高松から水戸に移るのに従って、高松から水戸に移るのに従って、高松から水戸に移るのに従って、高松から水戸に移るのに従って、高松から水戸に移るのに従って、高松から水戸に移るのに従って、高松から水戸に移るのに従って、中政次も、同様に高松から水戸に移り水戸を得ます。長男は、となって、一人の男子があり、この忠政の素督を継ぎます。ちなみに、「私の知っている大森氏」は、この忠政の系統です。

争乱(天狗・諸生の争乱)があり、続き、この忠恕の時に幕末の水戸勝――忠告――忠以――忠恕とこの忠栄のあとは忠孝――秀

その争乱の中で諸生党(佐幕派)その争乱の中で諸生党(佐幕派)によってか、その後の大森家は「賊軍」、ってか、その後の大森家は「賊軍」、ってか、その後の大森家は「賊軍」、ってか、その後の大森家は「賊軍」、がらも外されたことにより、秩禄処下民」の族称制度中の「士族」からも外されたことにより、秩禄処平民」の族称だけは許され名誉回復族の族称だけは許され名誉回復にきましたが(復士族)なるが、現立と、

一一大森家についての補記

にこの事業の中心力となり、大き を投じた大森家は、数代のあいだ 時であったので、その開拓団に身 定着した頃の備中国は、児島湾干 ったとされている」。その子孫が 井城に逃れ、ここにおいて世を去 落ちたのち、三浦義意を頼って新 の系図によると、藤頼は眞田城を の子孫であるとされている。同家 備中住の大森家だけは六代藤頼 の系統から出ているのであるが、 て、以上の諸家はみな、五代実頼 次のように記していました。「さ な業績を挙げた。それから以降は **拓、新田開発の事業の起きていた** 大森家について、中野氏は同様に、 「諸国流転の辛酸をなめた末に 次いで、備中大森家です。この

こうした中野氏の記述に対しは、神戸に住んでいる」と。られて明治に至った。現在この家大里正となって、名望家として知大里正となって、名望家として知

名に取り立てられた」と。 備中国都宇郡、賀陽郡に於いて大 0) に東軍に属し、その功により ていたが、関ケ原の戦い(160 しばらくは武蔵国岩槻に放浪し 主家と衝突して備前国を退去し、 は、元宇喜多家の老臣であったが、 万九千石の領主戸川肥後守淕安 います。「早島、帯江を含む庭瀬二 実を取り上げ、次のように記して その直後の記述からは確かな史 述になったことを避けるためか、 帯江から早島に移ったらしい」と。 引き連れて上通郡中井村を経て、 に幼くして先立たれ、弟妹と母を い。播州赤穂で医を生業としてい にやって来たかは、はっきりしな 門安元がどのような経緯で早島 す。「早島大森氏の元祖、與三右衛 頼忠氏は、次のように記していま た父玄仲(頼実とも実忠ともいう) て、前掲の「岡山県下の大森氏― しかし、このような伝聞的な記 早島の大森氏を中心として」で、

るが、戸川の領内には徳川家康が九年(1614)、大坂の陣が起こた戸川氏に献じたという。慶長十を戸川氏に献じたという。慶長十戦いの時、安元は自家より軍用金の記述に戻って、「この関ケ原の不の上で、再び大森氏について

敗れるかも知れないという風評 した。これに対して戸川氏は、 「『肥後守(花押)』のある、早島 村庄屋・百姓中に宛てた『急度ふ 村庄屋・百姓中に宛てた『急度ふれ候』にはじまる文書」を発し、 で「一般寺(花押)』のある、早島 が流れ、百姓たちが年貢を未済の がった。これに対して戸川氏は、 でいう名が登場するのであるが、そ いう名が登場するのであるが、そ いう名が登場するのであるが、そ いう名が登場するのであるが、そ いう名が登場するのであるが、そ

そして、「これらの事実から窺えることは、早島の大森氏は、慶えることは、早島の大森氏は、慶安元の妻は帯江の大庄屋で妙忍安元の妻は帯江の大庄屋で妙忍安元の妻は帯江の大庄屋で妙忍ち建立の願主であったが、かかる名望家との婚姻関係が成立することを見ても、早島大森氏の地位がいかようなものであったが、かかることを見ても、早島大森氏の地ることを見ても、早島大森氏の地ることを見ても、早島大森氏の地を治かかろう。安元は塩地、頓行、が分かろう。安元は塩地、頓行、が分かろう。安元は塩地、頓行、が分かろう。安元は塩地、頓行、村政に寄与する礎をつくった」と村政に寄与する礎をつくった」と

郎忠恒、と順調に家督相続が続き門惟忠――助太郎昌忠――與三右衛門知忠――與三右衛門短忠――與三右衛門元忠――孫九郎経忠――実――與重右衛門元忠――孫九郎経忠――與重右衛門元忠――孫九郎経忠――與三右衛門元忠――孫九郎経忠――與三

明治を迎えます。そして、「明治維明治を迎えます。そして、「明治維明治を迎えます。その後は仁吉忠信とになります。その後は仁吉忠信とになります。その後は仁吉忠信とになります。その後は仁吉忠信とになります。その後は仁吉忠信とになります。その後は仁吉忠信とになります。その後は仁吉忠信とになります。そして、「明治維治三十四年までその職にあった」と記しています。

しかしこの間に、早島の大森氏のもとでは、その後の家運を左右のもとでは、その後の家運を左右のをというのも、「惟忠の男子はすた。というのも、「惟忠の男子、昌忠(十一代)を養嗣との男子、昌忠(十一代)を養嗣との男子、昌忠(十一代)を養嗣との男子、昌忠(十一代)を養嗣との男子、昌忠(十一代)を養嗣に十三代忠信が生まれた。昌忠の跡は藤波氏から忠恒(十二十三代)を納めて家督させた」ために、早島大森氏の家系が複雑化した中島大森氏の家系が複雑化した中島大森氏の家系が複雑化した中島大森氏の家系が複雑化したのもとでは、その後の家庭が生じた。

を捨てることになり、一家は神戸を捨てることになり、一家は神戸を捨てる男子の出生を見なかったこむよくなく、またこの二代についともあって、忠信とのあいだは必ずしともあって、忠信の代には急速にても男子の出生を見なかったいら、次のように記しています。「この次のように記しています。「この次のように記しています。「この次のように記しています。「この次のように記しています。「この次のように記しています。」

に移り住んだ」と。

わりに

えば中野啓次郎氏の『小田原市史 されていることを知りました。 心が生まれるとともに、史料発掘 その末裔たち」に対する新たな関 機に、「旧小田原城主大森一族と の意味では、今回の私の論考を契 て新しいものではありません。そ 発表されたように、こちらも決し 84) 九月に『高梁川37号』に 心として」も昭和五十九年(19 あり、大森頼忠氏の論考「岡山県 昭和六十二年(1987)三月で などの復元作業が終了したのも た水戸大森氏「家系図」や「家譜」 ます。しかしながら、私が入手し れぞれ出版されたものであり、す も平成十年(1998)三月にそ 市史 通史編 原始・古代・中世』 年(1966)に、また『小田原 だし、それらの諸文献のうち、 興味深い諸史料や諸文献が蓄積 元小田原には、大森一族に関する いて調べていく中で、さすがに地 主大森一族とその末裔たち」につ まったことですが、「旧小田 下の大森氏――早島大森氏を中 でにかなりの時間を経過してい 新たな展開が見られることを 最初はまったくの奇 上巻 歴史編』が昭和四十一 から 原城 例

倉時代の小田原を巡る (二)

鎌

中村党の本貫地

じめに

IR 国府津駅から神奈川中央バスの二宮駅北口に向かうバスバスの二宮駅北口に向かうバスバスは新坂呂橋でまた東に向かい、二宮駅へと向かって行く。こい、二宮駅へと向かって行く。この新坂呂橋より北側が鎌倉時代における中村党の本貫地、つまり本拠地である。中村党とは源り本拠地である。中村党とは源すが今中井町にかけての中村党とは源る武士団である。今回は小田原る武士団である。今回は小田原る武士団である。中村党とは源すから中井町にかけての中村党の本貫地を巡ってみたい。

1 中村党とは

忠常へとつながる(1)。 ともそも中村党とは桓武平氏 の平良文を祖とする武士団である。相模国でいえば鎌倉党、三浦 る。相模国でいえば鎌倉党、三浦 が中村荘の庄司となり、忠頼 ・義澄・忠光・忠道とおり、宗 が中村荘の庄司となり、忠頼 は村岡次郎とも呼ばれ、上総介 は村岡次郎とも呼ばれ、上総介

る②。源義朝が大庭御厨に侵入持つ「官宣旨」に初めてあらわれは、天養二年三月四日の日付をは、天養二年三月四日の日付を

野村 朋弘

した事件について記されたもので、義朝の与党として中村庄司で、義朝の与党として中村庄司で、義朝の与党として中村庄司で、義朝の与党として中村正沿っていない。ただ中村川に沿った地域、現在の小田原市小竹や中井町を含む地域と考えられている(3)。

根を張っていく(4)。郷、土屋郷といった西湘地区には、この他に二宮川匂荘や、土肥けれるの地に二宮川匂荘や、土肥けれるの地に二宮川匂荘や、土肥けれる。

宗平の初出が源義朝の与党で 家人として活動していた。治承 家人として活動していた。治承 家人として活動していた。治承 四年(一一八〇)八月に源頼朝が 「先相率伊豆相模両国御家人許、 「先相率伊豆相模両国御家人許、 「先相率伊豆相模両国御家人許、 「先相率伊豆相模両国御家人許、 「た相率伊豆相模両国御家人許、 「た相率伊豆相模両国御家人許、 「たれ下、一門、 「中に「土肥次郎実平・同弥太郎養 中に「土肥次郎実平・同弥太郎養 中に「土肥次郎実平・同弥太郎 でいる。

友平、五男の頼平らがいた。重平次男の実平、三男の宗遠、四男の中村宗平には嫡子の重平の他、

ようになっていく(6)。 村党での中心的な役割を果たすなる。特に土肥実平と土屋宗遠と、それぞれ拠点を持つようにと、それぞれ拠点を持つようにと、頼い仕屋、友平は二宮、頼平は堺は中村を名乗り、実平は土肥、宗は中村を名乗り、実平は土肥、宗は中村を名乗り、実

を戦に参加した中村党は頼朝の 合戦に参加した中村党は頼朝の 会戦に参加した中村党は頼朝の たに挙げた『吾妻鏡』の記述のあ たに挙げた『吾妻鏡』の記述のあ とには「令赴于相模国土肥郷給 也」とあり、中村党の拠点である 也」とあり、中村党の拠点である 也」とあり、中村党の拠点である で土肥郷」が本陣となっていた。 何き従い房総に逃れ、近臣とし ての地位を築いていく。

東朝は鎌倉を本拠地として思い定め、幕府を打ち立てていくい定め、幕府を打ち立てていくわけだが、その中で中村荘は数回、『吾妻鏡』に登場する。最も回、『吾妻鏡』に登場する。最も回、『吾妻鏡』に登場する。最も回、『吾妻鏡』に登場する。最も回、『吾妻鏡』に登場する。最も回、『吾妻鏡』に登場する。最も回、『吾妻鏡』に登場する。勝長寿院の供養を遂げている。勝長寿院の供養を遂げている。勝長寿院の供養を遂げている。勝長寿院の供養を遂げている。勝長寿院の供養を遂げている。勝長寿院の供養を遂げている。勝長寿院の供養を遂げている。勝長寿院の供養を遂げている。勝長寿院の供養を送げている。勝長寿院の供養を送げている。勝長寿院の供養を送げている。勝長寿院の供養を遂げている。勝長寿院の供養を遂げている。勝長寿院の供養を遂げている。勝長寿院の供養を行い邸に戻った頼朝が建立した重要な寺に関する。

告げている(9)。京都にいる源義告げている(9)。京都にいる源義と源行家を討伐するためであった。「群参御家人、常胤已下為った。「群参御家人、常胤已下五十上洛之由者、朝政朝光已下五十上洛之由者、朝政朝光已下五十上洛之由者、朝政朝光已下五十上洛之由者、朝政朝光已下五十十八人云々」とあり、御家人の中であされた。翌日の二五日には朝むれた。翌日の二五日には頼朝自身も上ろいるであるこれく。

月二九日条 【史料】『吾妻鏡』文治元年一(

為征予州備州等之叛逆、二品今為征予州備州等之叛逆、二品今 是之、山道北陸之輩者経山道可 委会于近江美濃等所所之由、被 變會等。又相模国住人原宗三郎 宗房者勝勇敢者也、而早河合戦 宗房者勝勇敢者也、而早河合戦 宗房者勝勇敢者也、而早河合戦 司馳参洲俣辺之旨、被仰下于彼 可馳参洲俣辺之旨、被仰下于彼 可卿参州侯辺之旨、被仰下于彼

人等悉参集、 宿相模国中村庄云々、当国御家 先陣、千葉介常胤在後陣、今夜止 巳剋令進発給、土肥二郎実平候

いう。

三の御家人らが悉く集まったと目の宿泊は中村荘であり、相模日の宿泊は中村荘であり、相模平、後陣は千葉常胤が勤めた。当平、後陣は千葉常胤が勤めた。当頼朝の先陣は中村党の土肥実

はどこに

奈の順

順に説明して行こう。

まず神

くことを想定して③→②→①

神奈川中央バスで向

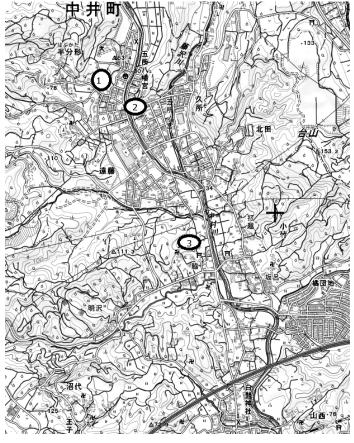
か

あろうか。村荘の館とはどこにあったのででは頼朝が宿泊したという中

③ ② ① 服 荘 城 の窪 司屋の人 敷 (鳥ノ久保

地 理 の院 線と呼ばれるもので中井町と小県道七○九号線で、中井羽根尾下車する。この道は神奈川県の奈川中央バスの下小竹停留所で 川に沿 田 |呂橋の十字路から少し脇に入 を北上して新坂呂橋を過ぎ、 原市を結んでいる道だ。 って作られている。 中村

一図にポイントを落とし左の図は国土地理院の ポイントを落としたも



(国土地理院地図)

平い窪方が地 方メー ルハウスが建てられており、現在では案内板の後ろにビニ 案内板には 全貌をみることは 面積でいうと約七六〇〇 トルあり広さもある。 「この居館跡 計わ は な

下が在内中元は板 元は橘町であり、 |は小田原市小竹となっている||板を中心に撮ったものだ。現下の写真は「殿の窪」にある案 -村と前 むと③の場所に辿りつく。 秋葉神社の鳥居がある。 |羽村とがあり合併し 更にいえば

う。 ている。 の片岡永左衛門が発見したとい と記されていることを郷土史家 えられた。 があり、江戸時代には「殿ノくぼ 下中村小竹の字に「鳥の久保」 産地は残る一方は中村川があ三方を山に囲まれているこ こうした地形から類推する 中村庄司の館跡であると考

0

又後の鎌倉街道の要害の地点に

京師

方面より

灰東に下る官道

あり、まわりを山でかこみ、内部

る分には適していると考えられ通の要衝であっても、館を構えに近いということを考えると交に近いということは危ういが、山る。無論、現在の標高を基準にし る。 沿って走る七〇九号線よりも六いう。該当する窪地は中村川に することがないが二十.確かに中村川は現在 メートル までは氾濫することもあったと ほど高 い場所に位置す は現在で 年ほど前 は 氾

> とある。 およそ三反歩あり、 いることもあり、 神を祀り、 およそ八反歩、後方堂地(高地) からは五輪塔が七基出 窪地の西 北にある横穴古墳近 族の墓所を収めた_ 中 北側に屋敷 対氏の供養 土して

ホームセンターのコメリハードを越え、少し北にのぼり現在はまた殿の窪から中村川の支流 れている心。あたる場所に五輪塔二基が遺さあたる場所に五輪塔二基が遺さ 塔と推定されていた印。 & グリーン中井店がある裏側に また殿の窪から中村

(たき) 遠藤だが、 この場所は現 滝とは何か。 古くは「滝の前」と (たち) 在の から変化 地名は 一説に滝 中井



中村氏居館跡候補地(殿の窪)

「滝の前」の五輪塔

中村党の居館を指すのがたものといわれている。 あろう。 のが妥当でる。館とは

育委員会では室町時代のものとは残念ながらなく、中井町の教 えられる。 推定するに室町 推定している。 は残念ながらなく、話を五輪塔に戻る 確かに造形から 時代のものと考 戻そう。 銘 など

のものは近隣の塔を集積したのら石塔は銘がなく、特に宇塔坂塔が数基集められている。これ好に、宇塔坂に五輪塔や宝篋印立の他、中井町には中村川のこの他、中井町には中村川の 定することは難しい。 ではないかと推定され 時代を特

てまっすく進むと正面に現れる川にぶつかる。滝の前橋を渡っ輪塔から更に北上すると、中村・一点を敷である。滝の前にある五司屋敷である。滝の前にある五 でも有名なこの八幡宮は、 (一一五七)に 幡宮である。 勧請され 鷺 たと 保の舞 0

> が遺されている。 墓と伝えられる五の境内には中村宍 ら養村立い 五所八幡宮が、 **元**年 し合わせると非 荘年代は 司 日わせると非常に-(一一四四)と照 宗平の初 また五所八幡宮 いる。 不明だが 中 五. 宗 出 ·村莊 平の 輪 が 塔 天中の

のことを指すと考えられる。そ司とはいうまでもなく中村宗平は荘司屋敷と呼ばれていた。荘井町北田となっているが、以前 村宗平の活動期と五所八幡宮のあった候補地となっている。中のためこの地も中村氏の居館が 語された時期は重なっており 村荘を立荘した時期に荘 頭 丘の南側は、現在は中五所八幡宮がある龍 園の

五所八幡宮

が中村氏の居館として適当と主めており、殿の窪よりも城ノ内めており、殿の窪よりも城ノ内を昭和五七年 (一九七七) にまと会は、「中村一族追跡調査報告」ある。中井町の文化財保護委員 れる地域で、その中に城ノ内る。ここは中井町半分形と呼 0 のぼった地が更に中村! 。ここは中井町半分形と呼ばった地域に①の城ノ内が更に中村川の西岸に渡り北 。中井町の文化財保護委員地域で、その中に城ノ内がここは中井町半分形と呼ばった地域に①の城ノ内があった地域に①の城ノ内があった地域に①のはノ内があいた地域に①の城ノ内があいた。

が無い点に尽きる。 番の難点は、有力な文献史料それぞれに主張があるものの

張している。

した。そのため西湘から中村党の多くは和田養盛に加わり没落起きた和田合戦で、土肥・土屋氏しかし、建暦三年 (一二一三) に 代のみならず、南北朝・室町・戦害といった城跡があり、鎌倉時 害といった城跡があり、また中井町には床城や は早々に没落し、 国時代と合戦が行われている。 定出来なくなってしまった由 土屋氏が中村党の中心となる。 それもまた中村氏の居館 姿は見えなくなってしまう。 先にも記したが中村党の嫡 変わって土肥・ 鴨 由縁 沢 流 要

していに に五 を建てても不思議 たと考えれば、 宮を勧請し崇 八 幡宮 では なの拝

とした場合、「前」 そのため何時の段階での館なの は不明点が多い。 か、また誰の館なのか、城なのか 地は度々合戦が行われていた。 しまうものの、 たことが 例えば !から中村党はほぼ姿を消して鎌倉時代の前半の段階で、西 執筆するに際して歩いてみた。 「滝の前 あ それ以降もこの また今回 とはどちらを を 館 [も原稿 0 前

も異なる。 指すものなのか。 起点によって

決定打となるものは何もないとが中村氏の居館跡候補であり、 留するのが学問的立場である。 う。それまでは分からない、と保 が、改めて考古学的な調査など ているため難しいかも知れない 小田原市と行政区画がまたがっいうのが結論である。中井町と が行われることが望ましいだろ つまりは今回 村氏の居館跡候補 あげ た ① から③

い。また文治元年に頼朝は、海側 O工 京都と鎌倉を結ぶ東海道では 本貫地であることは間違いな リアが、 ただ①から③を含む広範囲の 値するだろう。 中村荘に宿泊したのは注 頼朝を支えた中村党 恐らくは挙 た中村党の

わりに

一つともいえるだろう。

筆者も該当地区を何度 か巡

- (7) 早 (6) (5) でが一模(4) どか 族土川な『吾る風が士村 の屋をお妻。土詳』 5 番要鏡には登場 をから類推する たと考えるのが がめ中村党の があると考えるのが 二生(3)御田次名并廿模(2)(1)註○□中厨太男代在一国□□但 族の佐奈田義忠 なお、土 中村荘については、厨内」と記されてい 太郎同 男同吉 挙でも、土肥や土屋よりも中四年八月廿日条の「扈従輩」のに移ると考えられる。実際、治ため中村党の中心は土肥・土 妻鏡には登場しな 代清大夫安行・三浦庄司 『吾妻鏡』治 『駿河相模の武家社会』清文堂、 また中村景平・ 大庭 後に記されている。 士』三、戎光祥出 村党については、湯 庁官人及字上総曹司 詳し 七年、野口実『鎌倉の豪族』 」と記されている。 田 「乗る。 明·中 府 推すると、 助弘、所従千餘騎、 御厨古文書」に 所目代散位源朝臣 い。なお初出は「か、戎光祥出版、二〇 が妥当だろう。 義忠も戦 村庄司同 である忠 連載され 盛平も以 年八月廿 戦死して 61 九八三年 遠平 福田 死 『吾妻 宗平・ Ш 同 そのこ して たも 源 十月相 降 以 平 義 頼 は日 相 そ 0 な 久 和 吉 朝清 11 小 条 入

「小田原おしゃべり倶楽部(OOC)」へのお誘い

小田原史談会では、演者に「気楽な話題」の提供をお願いし、参加した 方々とのおしゃべりを楽しむ会を毎月下記のように行っています。演者は どなたでも構いませんし、参加も自由です。

*日時:毎月第2金曜日 15:00~16:30

*場所:小田原市民交流センター UMECO 会議室 *準備:プロジェクターは用意します。(PC は要相談)

「気楽な話題」とは、例えば、これまで次のような話題がありました。

- 「頼朝はどこを通って鎌倉に入ったか」
- 「ペリー艦隊は小田原湾(相模湾)で何をしていたのか」
- 「曽我物語とはどんな話なのか」
- 「小田原藩士 有浦家について」
- 「古老にお聞きした下曽我の昔話」
- 「酒匂鈴木家のルーツと歴史」
- 「小田原宿の前に"をたはら宿"はあったのか」
- 「小田原周辺の鉄に関する古代~中世の遺跡のこと」
- 「縄文/弥生時代を変えた最近の年代測定技術について」

このように、調査研究の長年の力作と言うよりは、日頃気になっている 歴史上の出来事や人物について調べてわかったこと、"我が家"や地域の歴 史について調べてわかったこと、歴史に関連する興味深い技術の話のこ と、地域の古老などに聞いた昔話、おもしろかった書籍の紹介など、会場 の皆さまと気軽におしゃべりできるテーマをお願いしています。

最後に、「小田原おしゃべり倶楽部 (OOC)」に興味をお持ちの方は 小 田原史談会ホームページ(https://www.odawara-shidan.com/)の「お問 合せ」からコンタクトして頂ければ、次回の予告などをご連絡いたします。 (ホームページのQRコード)



られる。なもの勝見 され まっ (8) 高 を考えると、 頼 いことを示しているだろう。 領は た中: |づけがなされていたと考えた。源氏の菩提寺としての るのは、そうした可能 **鴻倉後期** 長寿院に埋葬し供養を 父義朝と鎌 村 し現在は廃寺とな 早々 嫡流が後 編 爆纂であ に途 田 政清 能性が えてし ること の首

二五五

四

あ

(9) 『吾妻鏡』文治元年十月廿四 (9) 『吾妻鏡』文治元年十月廿四 (11) こられの説は神奈川県史跡 標準地図を用いた。 で委員の石野瑛が唱えたもの 査委員の石野瑛が唱えたもの ないう。 12) 住所としては、神奈川県足 いう。 上郡中井町遠藤二一〇 上郡中井町遠藤二一〇 定 Ŏ 跡 あ 朝 ح 調

兀 H

や文書は焼失したという。但に火災にあい、それまでの残念ながら文明元年(一四六円十二年) 載はない。 が尊崇していたという。 は までの記録 四六九)

條 五代記

勝

四 郎

を真先に立てうちわ(軍配) 此旗を見て怖れざると云事なし、 たり、皆人黄八幡とぞ云ける、敵 葉の地に八幡の二字を墨にて書 を得たる大剛のものなり、旗は朽 総守綱成(つなしげ)在城す、 驚きがたし、其上河越には北條上 乱出来するといへ共、敢へてもて 国を堅固に守り給ふゆへ、俄の逆 然ども氏康公は境目の諸城に常 あらせず攻むる事昼夜を分たず、 て河越へ発向し、城を取廻し隙も んとする所に、管領上杉後詰とし 康公軍兵を催し駿河へ出馬あら 囲む、此由告げ来るによって、氏 駿遠参の勢を率し長久保の城を 元上州上杉憲政と一味し、義元は 氏康公守護たり、然に駿河今川義 河越の城を攻落せしより此の方 長久保(駿東郡長泉町)の城武蔵 の誉を得給へり、亡父氏綱公駿河 は関八州に猛威を振るひ、名大将 かり云う人なり、上総守一生涯三 上総守合戦の度毎に、黄八幡の旗 人は数度の合戦に先を駆け、其名 に多勢を籠め兵糧米を入おき、自 條氏康と上杉憲政一戦 衆を勇め勝ったぞり 度の大合 と云ひて勝利を得たり、 北條左京大夫平氏康公 戦にかっ \とば)を挙 此

といへ共、其憚りもなく早雲氏綱 **屓なく双方無事の御扱ひあり、然には縁者、憲政は旧臣、何れ御贔其頃古河の公方晴氏公は氏康公** 遺恨止ん事無し、無二に此城攻落 り、氏綱公に攻落され一門の恥辱 の合戦に勝利を得、世に秀でたる と云へ共、其子氏康若年より数度 終んぬ、氏綱公は六年以前卒去す の片端を切て取り逆威をふるひ 父子押領し、その上武蔵下総の国 日く、伊豆相模は公方様の御領国 処に憲政馬廻り難波田弾正入道、 守籠るゆへ、力攻めには成がたし、 の勢にて攻め戦ふといへ共、上総 し、会稽の恥を濯ぐべしと、数万 如し、先年此城は同名朝定居城な に上総守一人有事籠鳥を見るが 候ひぬ、然に憲政曰く、河越の城 く御旗本へ馳せ参べし、 善悪を見合をるさふらひ共皆悉 思へ候、此度御馬出さるゝに於て 方にもならん望み掌に握るかと 小野因幡守、公方様へ参候し申て 万の引句にも上総守の弓箭にて、 し其上は古河様を追討仕り、己公 大将の誉をあらはす、憲政を滅ぼ 東西南北に敵共味方共見へず ーと喚き勇みたり、是によて **〜と云ひならはし** は 然るとき たり

仰ぎ候由申上候処に、過半御納得 く候、たゞ何方へも御発行なく、 候、氏康公事も御膝元に候へば、 憲政頻りに申上らる、由、其聞へ 越をとりまき、其上御動座の儀を 取つめ候処に、憲政後詰として河 といへ共、すでに骨肉同姓の宮仕 是公方様扱ひ清くなく存じ奉る 立つ、一戦以前に公方様へ氏康 き由候上処に御 かり御赦免候は るに付て、河越籠城のもの身命ば 城中三千余人籠置候者共、運粮の され両年に及び御旗立られ候間、 り、やがて上意を翻へされ御馬出 正忠、小野因幡守以下申上るによ 思ひをなし奉り候処に、難波田禅 互ひの善悪により如何様御威光 此刻一方向に御懇切迷惑たるべ る、然に去年駿州より長久保の地 は猶以て忠臣一三昧にあふぎ奉 に参られ候上、若宮様御誕生以来 通の状を進上す、河越籠城に付て ば天に任すべしと、敵陣近く旗を 公出陣し有無に一合戦し運命を 既に城中餓死に及ぶ由を聞、氏康 用路を塞れ、各々難儀に及ぶ由承 有て御成句の御書、謹而(つつし によて河越の城通路二年塞がり、 方様河越へ両年御馬を出され、是 んで)頂戴再三拝読を経、 んば河越の城は数日を経ず攻 、要害明渡すべ 納得の返答の上 安堵の

し、下立砂窪へ押寄せられ候、氏拶の時刻を移さず諸軍一戦を催 ずの由、御ふくりつ以ての外の間 といへ共御陣中より招き出し、只官菅谷隠岐守、未聞不見の人に候 累年の宿望を晴れ候べし、此旨啓 れみ虚しからずんば、命運を開き 善を善不悪と悪君臣遍くもてな 企て、君子逆道なに事に候哉、不 き御企て、君子孫を絶されべき御 先忠を御忘れ、其子孫を絶されべ まで隠れなく候処にいく程なく 抜きん出忠勤を励まし候事、都鄙 義明様を追討し奉り、関東諸侍に 御頼みの間、君命背き難きによて 先年も父氏綱公上意をもて内々 日有無に一戦を遂げ奉るべく候、 康公時節到来逃れがたきの條今 重て上聞に達しがたき由、中使挨 けおき候間、一人も洩らすべから 処に、城中の者どもは天の網にか 今要害明渡し進ずべき由申上 逐げ氏康心底正路の儀、天道の憐 んぞ仰ぎ奉るべく候、今日一戦を 諏訪右馬助、 小田 治、 候

も憲政も兼て催す合戦、

互ひに関

二千余騎勇み進み切て出る、公方る、城中上総守是を見て門を開きく、面もふらず太鼓を撞て攻かゝ

るとにあり、小敵をば怖れ大敵を士の心ざしを一味にするとせざの勝負大勢小勢によらずたゞ軍あり聊命惜むべからず、其上合戦る諸軍に向って曰く、其運は天に公諸軍に向って曰く、其運は天に達せしめ候はんと書て贈り氏康

望に達し、勝利を得られし事弓矢 叶ひ戦場変らず又此度氏康公宿 戦しうち勝て朝定を亡し、其例に 十五日上杦朝定と河越に於て合 氏康公の父氏綱公天文六年七月 年庚午十月三日逝去なり、法名は に家督をわたし氏康公は元亀元 に治め給ひぬ、其後氏康公氏政公 とごとく馳参じ降人と成て幕下 奮ひしかば、公方上杦の郎従等こ は越後をさして敗走す、晴氏公は をはじめ皆悉く討取られぬ、憲政 訴の張本人父子三人、甥の隼人正 け追仆し突きふせ切ふせ三千余 敗北す、氏康公勝に乗て勢ひ追掛 たれつ半時戦ひしが、憲政打負け の冥加に適なへる武家、関東に於 大聖寺殿東陽岱公大居士と號す、 に付、それより以来関八州を静謐 下総へ落行く、氏康猛威を遠近に て名誉の大将とぞ人沙汰し侍る 人討捕たり、 声をあげ天地を響かし討 難波田入道は此度讒 つう

房州里見家の事

政弱兵らさぞ身にしみて覚ゆらめ、憲政と近年数度の合戦に及ぶり、憲政と近年数度の合戦に及ぶらず、此度の人数も敵を十分にしらず、此度の人数も敵を十分にしらず、此度の人数も敵を十分にしらず、此度の人数も敵を十分にしいに至て味方一ツは有ぬべし、今に始めらず、此度の人数も敵を十分にしちず、此度の人数も敵を十分にしい。

んと、天文十五年四月廿日時刻を

子の子まで山賤のほたの火けたり長久の国なり、然るに隣国下総り長久の国なり、然るに隣国下総り長久の国なり、然るに隣国下総の国と代々戦ひて、竟に無事なるの国と代々戦ひて、竟に無事なるの国と代々戦ひて、竟に無事なるしなるべし、古歌に親のおや子のしなるべし、古歌に親のおや子のしなるべし、古歌に親のおや子のしなるべし、古歌に親のおや子の見しは今、安房上総は南の海中へ見しは今、安房上総は南の海中へ見しは今、安房上総は南の海中へ

に留めんと命をば一塵よりも軽

扇を挙げて下知し給へば、命は義移すべからず、かゝれ兵どもと団

によって軽し討死して名を後記

ざれば動くことなかれと云へり、 らざれば視ることなかれ、礼に有 く上に片肴の礼と云て肴を其人 色々かはる、主君のかはらけを戴 の時、其人の位によって礼の次第 より屋形義高の御前へ諸侍出 正月の礼儀他に異なり、元正の を嗜み外に礼儀を専らとす取分 故に両国の侍礼儀厳重に有て上 らざれば聴ことなかれ、礼にあら くし命を軽んず、孔子曰わく礼に ところなれば一足も引ず名を重 と云々、義理を知て健気にすべき 頭義高仁を第一とし給へば、諸侍 いふ事なしと云々、 専とし文武を嗜み給へり、論語に 法かはる、され共三綱五常の道を たぐへて思ひ出せり、 上を敬せずと云事なし、心に律儀 たる人も下を侮らず、下たる人も 有らざれば云ことなかれ、礼にあ 皆仁の道を行ふ仁者必ず勇あり 上義を好めば、下敢へて服せずと で形見とぞする、と読めるも是に 又両肴の礼とて主君 主君里見左馬 故に万の作 仕 暁



に下総の国には安西金鞠丸東條を名乗る、てへれば夜討曽我の舞四天王と号すと云々、何れも在名

年の夏里見小田原へ証人を渡し 品様々の礼儀あり、 むが定る礼儀なり、 此人々文武に達し其上子細有て 金鞠、丸、東條と号し四人の侍あ 我聞伝へしは昔安房の国に安西、 し時、ある老士に逢て房州里見家 たりと云々、予安房の国へ行たり より、以来大国に臣服し安堵の国 和睦す、 氏直と戦ひしが、扱ひ有て天正五 なく静なる事なし、 月中は諸侍此礼儀に拘づらひ暇て後亭主盃を取てあぐる故に、正 に七度づゝ酌とり十四度行返り でも正月盃の礼儀は定りて、互ひ 外の礼、居礼立礼とて君臣の間に 人飲ず両方見合同時に茶をも飲 両茶の礼と云事あり、 の先祖を尋るに、老子語りて曰く 前 へも引事あり、 此時に至て他国を見始し 国を四人して修領す、 然に相州北條 下々に至るま 此上に敷居内 其上片茶の その時は

れ終んぬ、其後安房の国は里見義 其上滅亡せし三人の郎従等皆も 美に心ざしを寄ずと云ふ事なし、 武略智謀の大将たる故に、諸人里 く民をなで慈悲愛敬を専らとし 分て合戦す、里見は仁義の道正し 繞らす、里見其色を覚り又二家に る思惑にや、里見を滅ぼさん謀を 西一人守護とす、然に安西如何な に乗てこ、へ押寄せ彼処へ馳走 現かと信じ、団扇を預け戦大将と を感じ摩利支天八幡大菩薩の来 者軍の節に及で手立てを云ふに 堪忍す、是は故実の勇士なり、此 へ移りて、安西家中に浪人分にて る仕合にや上州を退き安房の国 住人佐馬助義豊といふ侍、如何な 算を乱し合戦す、其頃上野里見の 分て弓矢をとり東西南北に於て 事なれば記し侍る、然に房州四人 妻鑑に記せり、此名人の争ふべき あらば、尽く搦め参らすべきと吾 の国の住人丸五郎信俊、安西三郎 に打負け舟にて房州へ移り、 の在所あり、頼朝公石橋山の合戦 とあり、是は相違なり安房に此四 豊持国たり、 って馳せ加て里美は多勢安西は し三人を打滅ぼし、安房の国は安 し数度の合戦に勝利を得、 景益を最前に召連れ京下の者是 云在所に新城を興し居城とす、 一事として羞づる事なし、安西是 竟には安西討負け滅亡せら 運の末にや不和出来、 てへれば里見稲村と 、剰へ勝 既に

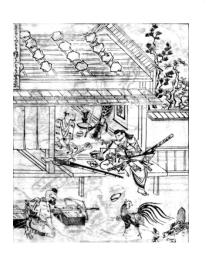
き軽きを捨て大きに付き浅きを 浅深あらん時は、小を捨て大に付 びれたり、然ば仁義にも大小軽重 きを隔て新きが古きをへだつと 品々の作法有、左伝に遠きが親し にまかせ正月出仕の礼に官位 家の流れ諸牢人を抱へ置き、先例 らに其感徳なし、それ当国に昔公 その証し御感状戴くといへ共さ 侍ども訴状を捧げて曰く、 あらざれば、合戦の砌忠有る侍に 忠臣等に知行を皆さき与へ、明地 房上総両国計りを持来り相伝の ぐらさる、といへども、昔より安 る侍共に賞を与へんと思慮をめ 義高の時代とかや、合戦の砌忠あ 睦の義なし、爰に一ッの物語あり 康時代まで北條家と戦ひ竟に和 は同国久留里に城壁を構へ在城 取立彼の地へ移る、義弘長兄義高 子息義弘時代に上総佐貫に城を 勝て上総の国を切て奪る、義豊の に稲村殿とも申き、 すて、深きに付く、何れもそれぞ 云々、家に伝はる譜代の侍共末座 おうぢより我らまで数度の忠功 感状ばかりを出さければ、 は一所もなし、金銀米銭の余慶も に城を興し居城とす、義頼の男義 義高の嫡男義頼時代、安房の館山 を切て取り、上総へ討入て戦ふ、 す、其頃相州北條氏康公下総の国 の道理に叶ひ至極する処を至 国司丸谷上総介と戦ひ、 なり軽賤の次第面目灰にま 、前々親 両国の

扨又上総の国 礼を赦免せられたり、又豊前守翌き走り廻りなり、此褒美に片肴の り組んで落ち、左京亮を押へて首 眉をひらきける、合戦日々の事なし給ふ、諸侍願望たんぬと喜悦の の礼位を宥免せらるべしと堅約 忠臣には感状をばさしをき元日 むるの所以なり、自今以後に於て 聞し召訴状の旨至極せり、賞の疑 前の大幸なるべしと言上す、義高 御感状をさしをかれ元日の礼を もって心とす、君は民をもって子 て有つるが冥加に叶ひ、はや三 田豊前守は氏も位もなき平侍に 彼が首を討て片茶の礼を許され 後競り合ひ戦ひに豊前守鳥井左 を取て両者の礼を許さる、、又其 日の戦ひに、 をかくる処に山田豊前守と云ふ れば諸侍この元日の礼位に望み はしきは与ふるに順ふ、恩をひろ 殆ど会稽の恥辱を清むべし、是生 云々、凡て自今以後忠有る侍には とす民は君をもって父とすと たる時は忠臣をもってし、臣臣た 善にとゞまると云り、古語に君君 兼約は当月廿日以前の義なり、山 たり、諸侍是を見て有難や君臣の て戦ひ数ヵ所の手を負といへ共、 衛門尉といふ剛の者と名乗あふ 者合戦の砌、一番鑓をつき比類な く君は臣を以て礼とす、臣は君を る時は君憐みを残すと云り、又曰 一位づ、赦免せらる、に於ては 忠勤をぬきんで片茶の礼位 岡田左京亮と馬上よ

> 里家の系図を持り、予見しに清和 逆の義有て、秀忠公の為に遠流せ 義康忠義六代目に当って忠義本 し不審我は老士物語を記す者な よりは七代なり、此内義高の名な 天皇より忠義まで二十七代里見 家義豊より始まり、義弘義高義頼 武勇を専らと励ましが、房州里見 国に奮ひ誉を子孫に伝ふべしと 後世の名なりといへり、 に尽きず、卓然として朽ちざるは 軽くす、欧陽公が本論に万物と共 望をかけ、一生涯の本懐此一事に 合かなと両国の武士元日の礼に は冥加の侍浦山敷(羨ましき)仕 て百を進むは是かや、 で赦免なり、ひとつを賞しても しくはなしと命をば一塵よりも 始り、義俊よりは十九代、義曹 扨又房州衆に紹之と云連歌師 扨も豊前守 威勢を両

関八州に鉄炮はじまる事

云て年寄たる山伏あり、愚老若き見しは昔、相州小田原に玉瀧坊と



に下る星が堀辺の蛍かと

見るや我うつ鉄砲の火を

領を重ね木の枝に掛け六重を射精兵なり、弓勢を試みん為、鎧三郎為朝は大矢東引き日本無双の起は武士の家の宝なり、昔鎮西八 もよき鎧を帯すれば恐るゝにた 射ころす者多し、数万騎にて攻む 通したる強弓なり、保元の合戦に 他国弓箭に携はる侍此由を聞き、 き宝なりとて秘蔵し給へば、 放させ御覧有て、関東に類ひもな 御屋形氏綱公へ進上す、此鉄砲を 砲を一挺買いて関東へ持て下り 思議奇特なる物かなと思ひ、 やと問へば鉄砲と云物、唐国より 頃其山伏物語せら 目当とてうつ、我是を見、 永正七年に初て渡りたると云て なく鳴物のこえする、是は何事ぞ より毎年大峰へのぼる、 和泉の堺へ下りしにあらけ 味方に八郎一人有て忽ち 此矢に怖れ院の御門 今弓は有て 享禄初ま 、扨も不 、我関東 近国 此鉄



現は 出、暮るを遅しと相待つ処に、十置き、浜手の衆は舟に向て海際へ 砲三挺づゝ其間々に大鉄砲を掛鉄砲競べせんと矢狭間一ッに鉄 駈回って鉄砲を教へしが、 置たる事なれば敵にも劣るまじ、 りなく打崩すべしといふ、氏直公 るは、来五月十八日の夜数万挺の 程軍勢を揃え鉄砲用意せし事幸 もなく舟をかけ置、 敵は堀際まで取寄り、海上は波間 ば人毎に持しと申されし、 岸和田などと云物下りて、 震動し月の光も煙に埋れ偏へに 味方も一夜が間放しければ、天地 も関八州の鉄砲を予て用意し籠 鉄砲にて惣攻して、 ぜんと仰有て敵方より呼はりけ せ、敵味方の鉄砲のつもりを御覧 なるかな、 の合戦城攻めせしといへども、斯 目の下に見て仰けるは、 たって山城を興じ、 年北條氏直公小田原籠城の時節、 日の暮方より放しはじめ敵も れ限りなく見ゆる事万天の 時刻を定め一同に放さ され共火のひかりは 小田原の城を 館も矢倉も残 秀吉公西にあ 秀吉数度 関東を

令和4年・小田原史談会 初詣へのお誘い

一武蔵御獄神社一 (青梅市)

武蔵御嶽神社は、標高 929 メートルの御 岳山頂にあり、武蔵国を守ってきた天空の 神社で、古くから関東の霊山として自然を

敬う関東一円の人々から信仰されてきました。また、お犬様信仰としても 有名です。

実施日: 令和 4 年 (2 0 2 2 年) 1 月 19 日 (水)

行先: ①武蔵御獄神社および、②吉川英治記念館(青梅)

集合解散: 小田原駅西口(早雲像前)7時30分出発、18時解散予定 参加費: ¥8,000 (会員 ¥7,500)(昼食代込み、当日徴収します)

募集人員: 30名(最少催行人数20名) 申込先着順

申込方法: 12月1日より

小田原史談会 電話 0465-43-9803 (諸星)

問合せ先: 同上

*なお、新型コロナウイルスの状況によっては、中止することがあります。

思老相州の住人小田原に籠城し人々申て曰く、御詠吟の如く敵は 「本語の草叢に螢火の見へ隠れな なが如し、城中の鉄砲の光は宛ら と正さ笑みを含ませ給ふ事な、 は正とならずと申ければ、 とならず、誠に其夜の鉄砲に敵味 がならず、誠に其夜の鉄砲に敵味 がならず、誠に其夜の鉄砲に敵は と口吟び有しかば、御前に侯する

挺欲しき物かなと願

記』を文語体訳したものです。 ※本稿は訳者所蔵の寛永版『北條五代

片岡日記歩こう会

秦野八沢・菖蒲行き

良

ません。 小田急線新松田駅に「片岡日記歩明日から六月という日の正午、 た。都合十人。みんな若くはあり こう会」のメンバーが集合しまし 日から六月という日の正午、

よ)水道の不成工(不成功)の責 任を負ひ辞任を提出した」で始ま 中田町長も弥々(いよい

大正・昭和の小田原

さんもこれに出席しています。 の懇親会があり、水道委員の片岡 交わされて一段落、「花菱」で慰労 小田原町と足柄村で協調覚書が 二月、小田原警察署長の立会いで で大揺れに揺れたのです。翌九年 と水源の足柄村の人々の猛反対 ました。それが昭和八年夏になる 源地を求める「水道問題」があり 和の初めに、小田原町では水

の洋館の地鎮祭で園遊会を催し 代表する料亭です。この日、 の舞台となった、当時の小田原を 五月二日、白秋の「地鎮祭事件」 た後、「花菱」の二次会の席で、東 「花菱」は大正九年 (一九二〇)

> 相は藪の中で・・・、谷崎潤一郎立てたのだそうです。それから真 外れに盛大な園遊会について白京から芸者連中を呼び寄せた桁 婚騒動のお話。 も登場してくる、 秋の弟と義弟が章子夫人を責め 白秋・章子の離

議たちが「花菱」で一件落着のど 昭和になっては、 水道委員の町

昭和九年四月二十六日

情多く、委員会は苦情会となり、 意味で辞表を提出した」のだそう 困窮するのは目前なれば警告の 不計 (はからず)、今の理事者に不 此結果理事者もいつ投げ出すも 委員は)何のかのと自己本意の苦 るからです。それは「(町議の水道 足不満あるも投出さるれば猶更 ん自身が水道委員を辞任してい れに先立つ四月十四日に片岡さ 「中田町長も」というのは、こ

己本意としての町本意の故、一致の河野代議士派と、三派に於て自原因は町議が民政と政友と政友 辞めるについて片岡さんは、 そして、この日に中田町長まで 丁其

町議の選出を人物を第二にも第 う心持ちがあったのでしょう。 電車に乗り松田にて下車し渋沢 れる議員たちに呆れ嘆いている。 る祟りである」と、政争に明け暮 三にもして運動に寄り選出した 者一人かと思はれる。是は分派と 派にて全く何の臭気も無きは拙 す。突然のようにみえますが、か に向て歩行する」ことにしたので 遠足もと俄かに思立、十二時発の いうのか、片岡さんは気分一新、 ねてから八沢・菖蒲へ行こうとい 「今日は午后より用事も無れば そんな憂いを払い除けようと

我らはコロナ禍

用しての参加です。 く、コロナ禍でこの日もマスク着 大きな憂いもなくまた用事もな コロナウイルス以外取り立てて 八十七年後の我ら一行は、 新型

からなくなる事態が心配されまなり、本来であれば助かる命が助 す」と繰り返すばかりでした。 す。マスクの着用、手洗いや消毒 受け入れを制限せざるを得なく 者が増えれば一般の重症患者のビ・新聞は、「新型コロナの重症 いようにするのが一番の基本で の徹底など、飛沫を撒き散らさな 五月末はコロナ第四波で、テレ 原市では高齢者にコロ ナ

> ウイルス接種券を配布したもの ないという状況です。 の、いつ接種するのか全く連絡が

いる。お終いには、「水道委員も三 協調の出来ぬからである」と見て

遠足気分でバスに乗る

方面に向かいます。 たようです。お客ガラガラの寄 は少しずつ遠足気分になってき ている間の会話の様子から、一行 エックを済ませます。バスを待っ 額に非接触型体温計を当ててチ み、初夏の国道二四六号線を秦野 (やどりき) 行きのバスに乗り込 天気は良すぎるくらいで暑い。 さて、出発です。五月三十一日

農家を過ぎて県道に出つ」とあり しの街道なりと。四五間(軒)の 入る。爰は神山の小字茶屋にて昔 ると県道と川との中間の小径に 片岡日記には、「町を出、橋を渡

ト工場かな」なんて呑気な会話で て行ったんだね」「あれはセメン んは四十八瀬川沿いの道を歩い 一行のバスの中では、「片岡さ

譲地の中でした。 ここは意外にも、 寄の入口でバスは道を左に折 一行は湯の沢団地前で下車。 山の中でなく分

りなおす人あり。バスの通る広く と言いながら帽子を取って手拭 て長い坂道をしばらく行きます。 いで頬被りし、その上に帽子を被 日差しが強い。「おい、暑いぜ」

片岡さんの歌二首

らざれども山吹は真盛りに甚だ「左右の両山は新緑まだ充分な 一方、昭和初期の片岡さんは、

山のかげ木立のしげみ川のきし 咲き乱れたる山吹の花.

の歌にリズムがあるのは歩行の のと詠むいつもの歌とは違い、こ 庭の梢に雪が積もったの消えた で歌を詠う雅があります。しかも、 という具合で、曇天の下、花を愛

でしょうか。そしてどんな格好だ ったんだろうか。 片岡さんは一人歩きだったの

山には所々山吹のさき出てまこ り。暫く登ると渓流よりそは立石 行すれば、道は小渓に添て登りな また面白からむと八沢を志し歩 「左方に寄きと八沢道あり。 是も

滝つせと流るゝ水の白波に かげをうつして山吹のさく」

さんも遠足気分上々でした。 ここで二つ目の歌も出て、 片岡

林の中の道を行く

とちっとも変わらない家並みを ほどから突然右に折れます。街中 すよ」の声掛けで、広い通りの中 一行は先達さんの「ここ、 右で

> られました。 えてきました。ここで皆に飴が配 「今日の記録は誰が書いてくれ

るのかなあ

•

ある私が返事する暇もなく、今回ということで、口の中にまだ飴が てしまった。 の半日の様子を綴ることになっ 「青木さんかな」

装されてはいるが、周りに竹が茂中に入り、日陰にホッとする。舗中譲地を抜けてようやく林の り、土地が崩れている箇所も所々 にあります。

「この道は誰も通らねえだろう 「暗い道だねえ」

ら軽トラがやってきました。一台と言っているそばから、向かいか でなくまた来ます。生活道路なん

う大きな返事。 さんに聞く人あり。「勿論よ」とい 「この道を下見したの」と先達

「下界じゃあ、暑いって騒いでい

さんが陽気に言っている。同感で 歩くだけでも収穫だな」と手拭い 「気分いいねえ。今日はこの道を

開けてきました。どうやら八沢に だいぶ歩くと道の先が明るく 行くと、右下の方から水音が聞こ

られつつある。新東名からのバイ パスだそうだ。 きな樹の下、バス停「八沢沢ノ下」 傍で暫しの休憩となりました(写 さて、一行は八沢の入り口の大 道の右方にどでかい道が造



八沢沢の下バス停

親切な言葉に促され、一行は各々 畑の中に入れてもらってお土産 と言われ、レジ袋まで用意される。 渡してくれた。そして、出発前に、 と言いながら自作の案内書きを でに一行を待っておられ、「これ、 いて、土産に持ってってくれよ」 たばこ祭り用に作ったんだけど」 石邦夫さんのお宅があります。す 「前の畑からタマネギ引っこ抜 すぐ近くに今日の案内役の牧

出たようです。 片岡さんにも、こうあります。

を手にすることになりました。

タマネギを手にして記念撮影

となり人家も見ゆるは八沢の部 蚕は余りなさずと。」 なり。こ、は烟草を専ら耕作し養 落なりと。戸数も六十余にて閑静 行するも、出逢人なく少し下り道 「景色にみとられまた面白く歩

> ろうなあ」という声もあり。 タマネギのお土産はなかっただ する人がいます。「片岡さんには

下を抜けて菖蒲に向かいます。 イパス工事中の大きな橋脚の真 で「東講」とあります。一行はバ につきました。とても大きなもの 富士講の碑が建っているのが目 よく手入れされ、建物も立派です。 山門を一歩入ると、境内はとても うにふさわしい山道です。しかし、 の参道は「これが山寺だよ」と言 山門が見えてきました。宗淵寺へ って宗淵寺に向かう。木立の先に 県道に戻るあたり、濁沢の傍に 牧石さんの家の裏の小道を上



宗淵寺への参道

草乾燥小屋です。少しの上り下り 菖蒲で絶景に呆然と佇立 向かう先は上小学校近くの煙

畝に並べてあります。 ています。タマネギを掘り上げて 見入ってしまいました。 止めて人家とその周辺の景観に 側の木陰を選びつつ、時には足を ある道をてくてく歩きました。 道下の田んぼには水が張られ イノシシよ

けだろうか、柵や網で防御してい

みて分かりました。 今回実際にこの地に足を運んで 然と佇立し、此遠足の虚しからざ に新樹とりどりに彩色したる山 詰めて前方を見渡せば、黄菜青麦山畑の間を菖蒲に下らむと登り る畑も見えます。 が「呆然と佇立し」たというのも、 るを喜ぶ。」とあります。片岡さん 容は思ひも寄らざる絶景にて、呆 片岡さんの日記では、 「是より

してしまいます。 いうように、渋沢停車場から帰宅 帰宅したりは五時を過ぎたり」と 菖蒲を経て曲松の渋沢停車場に 着きしは三時半に、道法 ところで片岡さんは、 も三里余なりと。爰より乗車、 「是より (みちの

これから行く先が今日の目的な を歩こう」と謳ってあるからです。 しかし、 「秦野 なぜなら今回のチラシに 〈煙草の里〉八沢・菖蒲 我ら一行にとっては、

ありました。

周りした後、

煙草の乾燥小屋

車で先回りして待っておられ、 -で先回りして待っておられ、先上小学校の裏では、牧石さんが



乾燥小屋前にて牧石氏のお話を聞く

野地域でただ一つ残っている乾 燥小屋だという。前のお宅で小屋 に立って近くの煙草の乾燥小屋 に立ち入る許可をもらい、小屋を へ案内してくれました。これは秦 牧石さんの説明が

草の葉には秦野葉 時代でよく手伝わされたこと、煙 は乾燥小屋で人工的に乾燥した 秦野葉は天日乾燥であるが米葉 子供の頃は煙草栽培の盛んな (外来葉) の種類があったこと、 四十年ほど前の昭和五十九 (内地葉)と米

> でした、ここではとても書ききれと等々、体験を交えた詳しい説明 た秦野の煙草栽培が終了したこ 九八四)に三百年以上続い

土俵だから」という牧石さんの勧見て行きなよ。秦野でただ一つの めにしたがって、 に向かいます。 「せっかく来たんだから土俵を 上小学校の校庭

本格的な土俵があった

残る土俵と違って、これは本格的 な土俵です(写真)。 土俵があり、小田原市内の寺社に 上小学校の一隅に屋根付きの

作ったのだそうです。それが今に 撲好きで、全部の小学校に土俵を 九八二年頃、当時の市長が相



秦野市立上小学校の本格的な土俵



上小学校にて記念撮影

されているというので白鵬・日馬 ったそうです。 ずかしいのか、 それともまわしを締めるのが恥 は、相撲を取ることもないのか、 ったはいいが、最近の若者・児童 残るのはここにただ一つだけ。 校内に力士たちの手形が掲示 使われないままだ

らう。白鵬の手形にガラスの上か 大社相模分祠に所縁の深い大相 それは今年になって、 土俵を築き直した話をうかがう。 ら手を置いてみると、さすがにで 富士・鶴竜などの手形を見せても 玄関前で上小学校の先生から 近くの出雲

出しさんが三人来て、 撲の伊勢ケ浜親方の好意で呼び ボランティ



カット・内田美枝子

後日、杉山博久先生(『小田原市と初めて気づかされた次第。 後日、杉山博久先生(『小田原市史』考古担当)に八沢・菖蒲に行史』考古担当)に八沢・菖蒲に行史』考古担当)に八沢・菖蒲に行史』考古担当)に八沢・菖蒲に行

お別れした。さんとは、記念撮影をしてここでさんとは、記念撮影をしてここでてくれたというものでした。牧石アに近いかたちで土俵を修復し

(HPのQRコード)

渋沢駅で解散

(謹告) 「片岡日記・昭和編」を出版します!

片岡日記昭和編の連載中止について、会員の皆様へ。

本誌では、6年余にわたって片岡永左衛門の日記を連載してまいりましたが、読まれた感想はいかがでしょうか。昭和初期の小田原の世相が書き込まれており、興味を持って読んでいるという声もいただいております。

ところで、史談会では「片岡日記を読む会」で日記の解読を進め、この度「片岡日記 昭和編」の翻刻、出版の準備が整いつつあります。そこで、今後の本誌での連載が問題となりますが、このまま継続するとあと5年ほど続きます。一方、「片岡日記を読む会」では只今大正編の解読が進んでおります。「片岡日記昭和編」の翻刻本を出版した後も本誌に昭和編の掲載を続けることの長短を考えた結果、本誌での昭和編の連載を取りやめて大正編に切り替え、会員の皆様には「片岡日記 昭和編」の翻刻本を格安(印刷代実費相当)で提供することに致しました。翻刻本には「片岡日記目録(年表)」「人名索引」「口絵集」等を付けますので、読者の大きな手助けになるかと思います。長い間ご愛読いただいた皆様には以上の事情をご理解していただきたく存じます。

書籍名: 『片岡日記・昭和編』(A4版 254頁)

翻刻・編集: 「片岡日記を読む会」

発行; 小田原史談会 発行予定: 2021 年 12 月

定価: 1000 円 但し、会員の希望者には 500 円(送料別)で頒布します、

申込方法: お近くの小田原史談会理事に電話等で申し込む、

または、小田原史談会ホームページ(https://www.odawara-shidan.com/の「お問い合わせ」に、「『片岡日記』本を注文します」と明記して送信。





片岡永左衛門日記 昭和元年~9年



曽我物語を追っかける(三)

河津・赤沢・伊東篇

幸雄

ことになった。 島の、主に東伊豆を探訪してみる兄弟仇討の原因となった伊豆半は兄弟の足跡は追いかけず、曽我は回の「曽我物語を追っかける」

河津八幡神社

されてきた実戦的なものであっ の技があり、合戦の中から編み出 突く・封じる・関節を締めるなど 今日の相撲と違い、組み方や攻め 久を破っている。この頃の相撲は 津掛けという技で強敵の俣野景は武勇に優れ、奥野の相撲では河 鍛錬に用いたものだという。祐泰 側に飾られていて、祐泰が朝夕の る河津三郎祐泰の像がある。「力 いる。本殿の右側に兄弟の父であ かに遡った北西の地に鎮座して 石に関する逸話が各地に残って 受け継ぎ、幼い時から力自慢で力 方が多彩で、投げる・打つ・蹴る・ 石」または「手玉石」という三百 た。子どもの五郎もこの父の血を 一十キロもある巨石が社前の左 神社は河津川の河口からわず

老がいて、我々が小田原から来た「境内を清掃している二人の古

と地元で呼ばれている河津三郎 う。神社から少し歩いたところに の住まいがあった場所である。曽 館跡というバス停があり、谷津館 の寺から持ってきたものだとい れる二基の宝篋印塔があり、近く 道に河津三郎夫妻の墓と伝えら 鳥居と力石はもう少し前方にあ 内の規模は昔と変わらず、以前は 指して立っている。その左手の小 すなろ)の大木が真直ぐに天空を って、毎年地域の相撲大会があっ 社の周りの建物は変わったが、境 と伝えると大層喜んでくれた。 たという。像の背後には翌檜 (あ



河津八幡神社

血场

た源頼朝の無聊を慰めるために、行われた。当時伊東の小御所にい七日間の狩と掉尾を飾る相撲が伊豆奥野(現在の奥野ダムの付近)で安元二年(一一七六)十月上旬、安元二年(一一七六)十月上旬、

た。 我兄弟もこの館でともに生まれ

はクスノキの一大樹林が広がってしまった。かつて河津川の周辺の大楠を除いてすべて伐採され まではあったが、ここ杉鉾別神社津郷七抱七楠」として明治の中頃は河津には七本の大楠があり「河 念が沸き上がってきた。大地のエな大きさに驚き、それから畏敬のに近づくにつれまずその圧倒的 豊かな自然と肥沃な土地に恵ま らこの地を分与され、河津周辺の ていたのだ。河津祐泰は父祐親か される。樹齢一千年以上、幹囲十 なって天を衝く奔放な姿に圧倒 ネルギーがそのまま樹木の形と る森からすぐ見当がついた。巨樹 遠くからもこんもりと茂ってい みるがよいという。神社の所在は て河津の名所だから一度行って める。そこに河津一の大楠があっ 少し離れた所にある杉鉾別神社古老たちは、ここに来たら是非 ているはずであった。 れ、前途洋々たる人生が待ち受け 五洋、樹高二十四洋を超える。昔 (川津来宮神社)に行くがいいと勧

まで負かしている。頼朝もその技ちを倒した俣野景久を見事二度 息遣いと馬の蹄の音が聞こえて を身に着けた武士たちの激しい 場面を読むと綺羅々々しい武具 を結んで関係を深めていた。この 底へと引きずり落とされる。 は、この後至福の高みから奈落の 最大のヒーローである河津祐泰 いく。いずれにせよこの七日間の 士野の仇討の場面へと繋がって 三原野、 であり、 展開の鍵となる重要な舞台装置 では影の薄い存在となっている。 ているはずであるが、なぜかここ を目の当たりにて、大いに感嘆し 泰は三十二人の力自慢の武士た して催された相撲大会で、河津祐 くるようである。狩の後の余興と この地域の武士団は普段から仲 豆・駿河の武士たちが五百騎集ま 良いつきあいをし、互いに婚姻 巻狩は曽我物語の中で、物語の 南関東四ケ国 那須野と続き、最後に富 奥野の狩から始まって、 ・相模・

時東浦道と呼ばれ河津に通じる時東浦道と呼ばれ河津に通じるといた。祐親を狙った八幡三郎のていた。祐親を狙った八幡三郎のていた。祐親を狙った八幡三郎ので地の大木の陰で待ち伏せ三郎が椎の大木の陰で待ち伏せ三郎が椎の大木の陰で待ち伏せ三郎が椎の大木の陰で待ち伏せ三郎が椎の大木の陰で待ち伏せ三郎が椎の大木の陰で待ち伏せ三郎が椎の大木の陰で待ちばいた。本澤山の麓の難乗野の帰り道、赤澤山の麓の難乗野の帰り道、赤澤山の麓の難

を進め、激闘の末に二人を討ち取 戻った祐親は年が明けるや次男 り一帯暗い陰惨な気が漂ってい 周辺はよく整備されているが、 道は石畳が敷き詰められ、血塚の から山際に少し入った所にある。 下田街道で、 ったという。 祐長に三百騎を与え、狩野荘に兵 るような感じがする。伊東の館に 現在の国道一三八号 辺

十四歳の頃上洛し武者所に勤め と八幡三郎であるが、何故この二 ってなかなか帰ることができな 祐経の家来というが、祐経自身は 人が選ばれたのであろうか。工藤 さて祐泰を討った大見小藤太 伊豆の地には祐親の妨害もあ

と分岐して、 流を目指すこと十キロ、川は冷川 あたりで逆立つ白波の大見川が る土地に至る。この地域が昔の大 合流する。この川に沿って更に上 狩野川を遡っていくと、修善寺 小高い山並みの連な



見の荘 つまのさぶろう)に暗殺を命じたの 見小藤太と弓の名手八幡三郎 絆から信頼できる家来として大 を生んでいる。そういう家重代の 隆と結ばれ、 宗基との間にできた娘が後に祐 る。その玉江も再婚で、前夫八田 家政の娘玉江 (玉枝姫)を娶ってい かもしれない。 妻を亡くし、その後室として大見 弟の高祖父の工藤祐隆 (寂心) は前 いた。おそらく大見小藤太もこの 族に連なる者であろう。曽我兄 土豪である大見氏が治めて (現在の伊豆市に当たる) の中 工藤祐継 (祐経の父) **a**

じような運命を辿ったに違いな という。もう一人の八幡三郎も同 殺されて、死骸は野晒しになった が嘶いたために敵兵に見つかり に隠れていたが、近くにいた愛馬 つま) られた小藤太の最後は哀れであ まん」という読みではなく、現在 い。八幡は「やはた」とか「はち る。地域の口承によると、八幡(は もここの地名として残っている 「はつま」が正しい読みであろう。 伊東祐親の追討軍に追 来宮神社の大きな楠の空洞 い詰

間に男盛りの頼朝は八重姫を見

た。大番役で祐親が上洛している

麗しい八重姫という美女であっ

歳の頼朝は伊豆国の蛭ヶ小島に にある音無神社である。平治の乱 (一一五九)の後捕らえられた十四 次に我々の向かったのは伊東 一時伊東の小御所で暮ら



音無神社にて参加メンバー

はすっかり人家が立ち並んでい岸は「日暮しの森」といい、今でこの森のすぐ後ろが松川で、対 り合ったのであろう。 なスタジイや椋木の森となって るタブの木が立ち、辺り一帯巨大 初め、二人は音無しの森で逢瀬を いて、昼なお暗い。 年をこえる市の天然記念物であ 社が建っている。境内には樹齢千 重ねた。今はその音無しの森に神 はこの大きな木々の下で愛を語 頼朝と八重姫



日暮神社

という。頼朝は少し離れた小御所 以先の 日暮神社まで続いていた て、「日暮の森」も伐られ、広々と 森」と名付けられたと伝えられて ろ、川音が止んだので、「音無しの 川の音があまりに騒がしいので、 を楽しんでいる時、近くを流れる 無しの森」に通った。二人が逢瀬 る岡橋を渡り、 が暮れるのを待って、 からこの日暮神社まで来ると、日 いる。江戸時代は新田開発によっ 「川音よ、とまれ」といったとこ が、往時は鬱蒼とした樹木が百 八重姫の待つ「音 松川に架か

人であるが、前半生の歩みを見る 冷静沈着、時には冷徹と言われる て与えている。頼朝というと鎌倉 寺領五三石を永久の祈願料とし 近くの日暮山龍明寺という寺に 涯忘れ難く、建久三年(一一九三) した田圃に変わった。 頼朝はこの地での思い出 心人物で思慮深く が生

遠平に再嫁した。三女は最も見目女は最初工藤祐経に嫁ぎ、後土肥がいて、長女は三浦義澄の妻、次がいて、長女は三浦義澄の妻、次朝は自由で奥野の狩に随行する動は自由で奥野の狩に随行する

ったのが、伊東祐親である。監視していた。その頼朝の監視役とな

役と言っても半分は守り役で、

頼

児手

鶴丸の事が忘

n

あることが分かる。 と感情豊かな多情多感な人物 には男児ができ、頼朝は千鶴丸と このロマンスには後日譚 契りを結んだ八重姫との

が 間

で

らに北条時政を頼って難を逃れ 伊豆山の走湯神社に身を隠し、さ 次男祐長の機転によって、頼朝は は頼朝追討の兵を差し向けたが、 嫁がせた。怒りの治まらない祐親 う。さらに八重姫を江間小四郎に に沈めること)にして殺害してしま け(柴で包んで縛り、重りをつけて水底 丸を松川の上流の轟が淵で柴漬 怒し、二人の仲を引き裂き、 ら戻った祐親は平家を憚って激 名前を授けた。ところが、京都か 千鶴

る一帯の現在の伊東市役所に当 を構えた。仏現寺から大原にかけ まる海抜四十㍍程の丘岡に居館 ぎ、松川の東南の台地が次第に高 の東岸部を総称したものである。 を意味して、その範囲は伊豆半島 伊東氏の館跡とその 東祐親はその伊東郷を引き継 「伊東」の地名は 「伊豆の東 周

荷大明神を京都から勧請して建伊東氏の守護神である伏見稲 強風のため寒冷になるのに対し 西海岸が真冬になると海 伊豆に数多く残っている。それは 海の来宮神社の大楠を筆頭に、東い、伊豆には楠が多く繁茂し、熱 る。河津の杉鉾別神社の大楠とい 洞となっている古怪な巨樟であ 横から見ると内部はすっかり空 現れてくる。よく見れば正面、右、 蔭の暗闇から徐に一本の老樟が なる場所であった。社殿を蔽う森 り一帯の境内に繁る森は、祖霊の 左とそれぞれの木の顔が異なり、 宿る社として信仰されてきた聖 立したといわれる。昔からこの辺 東海岸は温暖な気候に恵まれ からの

> するまで拡大していった。 その範囲は伊豆国の約半分を領 て植物の生育に適しているため 力を東伊豆一帯に拡張していく。 を一族の守護神として尊崇し、勢 いわば伊東氏はこの大楠

寺は、河津三郎祐泰を弔うために葛見神社の神宮寺である東林 のであろう。 く後世になってまとめられたも が並んで建立されている。おそら して開き、境内の小高い台地の上 である。浦山の谷戸全体を寺域と 建てられた寺で、伊東氏の菩提寺 に祐泰の墓と曽我兄弟の首塚(伝)

伊東祐親の墓

東林寺があり、当時の伊東氏の中

である。館の周辺には葛見神社や する舟運に恵まれた便利な土地

心的場所と考えられる。

富な海の幸と多くの物資が集積

は初島を望む相模灘が広がり、豊 たる眺望絶佳の場所である。前に

に、高さ一・四㍍の五輪塔と歌碑がある。こぢんまりとした塚の中伊東祐親の墓と伝えられる墓域ブの坂道を登り切った丘の上に 供養のために子孫が造立したも が建っている。 のである。碑には、 から南北朝初期にかけて先祖の 東林寺の東からヘヤピンカ 五輪搭は鎌倉時代 1

いは孫の千鶴丸を虐殺し、頼朝に財産を奪った貪欲な陰謀家、ある 反旗を翻して執拗に命を狙っ と彫ってあった。 免(め)くみをは 作った人物で、工藤祐経の所領と 「三笠さして 満 祐親は曽我兄弟仇討の原因 (なほ) たのまん ゆくすゑまで (ま) もれる 祐親 を

> 興の開発領主であったといえる 命に領土の拡大と安堵に励み伊いえる。いずれにせよ祐親は、懸 く道理にも明るい人物だったと 断って、父と同様平家に殉じ、北 忠義を尽くした。その血は次男の 権威に取り入り、最後まで平氏に 平重衡や大宮の多子(まさるこ)の のではないだろうか。 東家の繁栄を求めた典型的な新 陸で終焉を迎えている。節義に厚 三祐長の命を救おうとするのを 祐長にも受け継がれ、頼朝が、再 族の繁栄を願って時の権力者の しかし、よくよく考えてみれば一 頑迷な人間ととらえ勝ちである。

れば稿を改めて述べたいと思う。 ても触れざるを得ない。機会があ 伊豆に関しては北条氏につい



- 「曽我物語」
- 「真名本 曽我物語 1 : 2

いることを知り、近くの狩野川に時政の娘政子と深い仲になって

けて行ったが、頼朝はすでに北條 ために峠を越えて韮山まで出か を裂かれた八重姫は頼朝に会う 別の人物にあてる説もあるが、こ 少年のはずである。江間小四郎を 時であるが、この時僅か十二歳の 條氏二代目の執権である北條義

こでは深入りしない。頼朝との仲

いだ江間小四郎、すなわち後の北る。ここで疑問なのは八重姫が嫁

めに創建されたのが誓願寺であ を建立し、我が子の菩提を弔うた い八重姫は音無の森の一

角に寺 れられな

身を投じて自殺してしまう。

「全譯 吾妻鑑」 1 新人物往来社



伊東祐親の墓

西相模の石造物 府川の道祖神

石

(高さ六三・五センチ) に

『小田原史談』 再録

西相模の石造物」 (道祖神を抜粋)

忠夫

相模の石造物(6)

掲載します。 よる、次の記事について再録して 忠夫氏(元小田原史談会会長)に 載しています。その中から、 祖神祭りに関する論考、記事を掲 本誌ではこれまで、道祖神や道 岡部

てお読みいただければと思いま 冒頭の保坂氏の講演録と併せ

> 第一二七号(昭和六二年一月) |西相模の石造物| (1)

> > のものがあるが、この写

道祖神には、色々な形

第一三二号(昭和六三年三月) 西相模の石造物」 (6)

いるものである。

渡橋のたもとに祀られて 真は、湯河原鍛冶屋の宮

周辺部に多く見られ双体

酒匂川の流域や、その

は大部趣きを異にしてい 僧形立像合形スタイルと

このお地蔵さんの形に

府川の道祖神

第一三四号(昭和六三年十月) 湯河原町鍛冶屋の道祖神

西相模の石造物」 大井町篠窪の道祖神

九九番地)にあるものだが、自然

八街姫命 八街彦命

道祖神は、いろいろな信仰が入

明治以降になってからである。 のものが登場するのは、大部分が だい、西相模の石造物に、神道系 比較的新しいものといえよう。ど いる。道祖信仰の歴史から見れば あるが、この府川のものは、明治 れる道餐祭の祭神で、古い由来が 四十四年一月十四日に立てられて 入れないように、都の四隅に祀ら 八街彦命・姫命は、疫神を都にと彫られている。

道祖神の表現形式には、種々異っ 極めるのは難かしい。それだけに、 りまじっているのでそのもとを見

をとらえて見てもいくつかがある。 たものがある。西相模の地域だけ

写真は小田原市府川の入口(一

治」と刻まれている。 · 積善家有餘慶 石寄付 なお、この道祖神の裏面には

(岡部忠夫)

ものと見られている。 再建の折、その年号が記された れたものが残っているが、後代 にある、江戸初期の寛文九年 れたものは、秦野市戸川棗開戸 長野県には戦国期の年号が刻ま (二交丸) のものとされている。 道祖祖で一番古い年号が記さ

年の年号があり、五指に入る 大井町篠窪のものは、寛文十

の合掌スタイルである。この種 るのに、篠窪のものは駒型座像 る。普通、光背型とか舟型に分 のものと違った形状を持ってい にある) であるが、他の寛文期 古さのもの(いずれもが西相模 大井町金子馬場にあるが、ただ のものは、私の知る限りでは、 類される双体立像の合掌型であ (岡部忠夫)

湯河原町鍛冶屋の道祖神 型が小田原市風祭、箱根 原市石橋以西の旧片浦村 似た単体丸彫坐像は小田 しかし、例外もあり同じ の分布に地域性がある。 東、長岡を初めとした伊 から湯河原、さらに、伊 にかけて多く見られ、そ 豆北部から静岡県駿東郡 山崎に見られる。 (岡部忠夫)



西相模の石造物(8)

大井町篠窪の道祖神

し年号が不明。

小 創田 創立 刊 史 昭和三十六年一月 昭和三十年七月

小〇年 田一費 原 史 談 会三十六四三三六 特別賛助会員

AWRIDAN 株式会社 鮑 屋

TEL 22-5185

伊豆箱根バス株式会社

神奈川旅行センター TEL 23-0266

大勺叫 薬局 TEL 090-3215-2001

*1*1\ 田原 ガス TEL 34-6101

小田原報徳自動車

TEL 22-4155

かまぼこ 靇 清 TEL 22-0251

かみやま小児科クリニック

TEL 24-0188

KSK せ印そば粉製造本舗 久津間製粉株式会社

TEL 0120-34-1157

COMTEC コムテック株式会社

TEL 22-4214

さがみ信用金庫

TEL 22-3121

杉崎茂法律事務所

TEL 24-1860

蛪 う本店

TEL 22-4951

0 **D** TEL 22-2078

(株) ナック中村屋

TEL 24-2211

平 店 井 TEL 22-5370

迊 株式会社 TEL 34-5151

税理士法人報 德德 会計

TEL 23-2171

^{建築金物}(株) 星崎仲吉商店 _{家庭金物}

TEL 34-2718

穂

小田原史談会ホームページ(新) URL; https://www.odawara-shidan.com/

南足柄市関本七三〇~ 〒二五○・○一○五 ております。お問い合わせは左記 論考・紀行・証言等の原稿をお待ちし 〇四六五 (七三) 田原史談」原稿募集 · ○八七九

純

瞳子氏が四年くらい前に書かれた『火定 (かじょう)』(PHP文芸文庫)を読んだ。天平時代の疱瘡 (天然痘) のパンデミックを、施薬院の若い医師の視点から描いた歴史小説である。別な研究者によると、造新羅使からもたらされたこの疫病によって、当時の政治の中枢にいた藤原四兄弟をはじめ、国内の人口の三分の一が亡くなったと推定されている。小説では、治療法が無いまま次々と人が死んでいく中で、でいるが一でなったとででも効果のある治療法を光景。その状況で、少しでも効果のある治療法を水の一をはロナウイルスは死亡率は低いが変異しやすいた方う。▼コロナウイルスでも、天然痘は死亡やすいれている。小説では、治たって、保坂匠氏の「小田原の道祖神と道く、新型コロナーの普演録第二弾として、今号と次号にわたって、保坂匠氏の「小田原の道祖神と道く見かける道祖神も、全国何処でも見られるわけではなく、また道祖神の形も地域によって異なるところは興味深い。(編集子)